

パミール遠征登山報告書

1974年レーニン峰



新潟大学山の会・大阪外国語大学山岳会パミール登山隊

目次

序	1
小林兼一郎	
はじめに	2
布施栄明／丸山忠雄	
隊編成	3
第1章 交渉経過	
入山交渉	4
角張嘉孝	
ヤルタ岩登り大会	5
藤井洋	
第2章 登山記録	
キャンプ・パミール'74の組織	10
田村俊介	
レーニン峰登山記(リブキンルート)	12
近藤憲司	
レーニン峰登山記(マズリエリナ)	17
田和芳郎	
ソ連選抜女性隊の遭難	19
田村俊介	
登頂雑感	24
佐藤登	
第3章 各係報告	26
保険—田和芳郎／気象—角張嘉孝	
医療—小松原秀一／会計—加藤勝久	
装備—斎藤一弥／食糧—佐藤登	
パミール探検小史	33
田村俊介	
レーニン峰ルート概説	35
斎藤一弥	
レーニン峰登頂クロニクル	40
田村俊介	
資料	41
医療薬剤・器材／会計収支	
パミール登山隊装備一覧表	
食糧品リスト一覧表	
編集後記	

序

「新潟大学山の会」は新制新潟大学が昭和二四年創設された当初より、旧制新潟高校OBも加えた包括的な団体として発足いたしました。そして昭和三五年頃に至り、新制新潟大学山岳部OBよりなる山岳団体として再発足したわけであります。

本会は山岳部現役および旧制会員と交流をはかりながら、旧制高校が集中的に入山していた飯豊山域に足跡を残して参りました。一方、海外すなわち氷河のある山へのあこがれが、夢から実現しうる時代となってきたのであります。小さな隊を昭和四二年サラグール（七三四九m）に派遣登頂したのを皮切りに、数パーティが海外に踏跡を刻みました。そういう模索期を経て、ただ海外へ出るだけではなく、しだいに新潟の地の利を生かした山域を選ぼうという気運が高まってきました。そこでハバロフスク市と姉妹都市関係にあつた対岸のソ連領域とくにパミールに的をしぼり、六年がかりで交渉して参つたわけであります。その間、副産物として昭和四六年および四八年にはソ連邦クリミア半島で開かれた「青年登山家のための国際トレーニングキャンプ」に参加することができ、共産圏の岩登りひいては登山に対する認識の相違等を実際肌で感ずることができました。

今般、多年の念願がかない所期の目的とはやや異なつた形態ではありますが、国際パミールキャンプに日本山岳協会、日本山岳会その他各位の御推薦により参加することができました。多数の方々の御努力により与えられた貴重なチャンスを生かすべく、各隊員はそれぞれの志向、感慨をもつて参加し、大いに得るところがあつたと聞いております。それは当報告書より御賢察いただければ望外の喜びでございます。

重ねて各位に御礼申し上げますとともに一言あいさつを述べさせていただきます。

昭和四九年十二月三日

新潟大学山の会 会長・小林兼一郎

はじめに

新潟大学山の会
パミール登山隊長

布施栄明

われわれは、今夏六年来の念願のパミールの地をふむことが出来た。パミールの夏は、ぬける様な青空と蒼水、すさまじい風雪、地震、雪崩と、人の心とは関係なく、めまぐるしくすぎさっていった。この間、十名のアルピニストが、ザ・アライ山脈の氷雪のなかに眠った。パミールは遠くてきびしい山の感が深い。

われわれの参加した一九七四年国際パミール・キャンプは、ソ連山岳連盟の主権によるものであり、一応の自主性は尊重されてはいるが、日本で考えられるいわゆるエクスペディションとはいえないかもしれない。そこには、ソ連におけるアルピニズムそのものの考え方の違い、国家体制、国民性など、いろいろの問題がからんでいる。パミールへの門戸は、こういう形でなければ通りえないという現実があった。このことについては、われわれも真剣に考えざるをえなかったが、とにかくパミールへ行きたいという希望と憧れが、今回の山行となった。幸に、レーニン峰、ラズジェリナヤ峰にも登頂することも出来た。今回の山行を足がかりとして、さらにパミールの山々を求めていきたいと念願している。

ここにパミールでの行動の記録をまとめることが出来たのは、関係各位の深いご理解とあたたかいご後援の賜であり、深く感謝の意を表する次第である。

大阪外大山岳会では一九六四年頃から、ソ連邦の山岳地域に遠征隊を送るべく、ソ連アルピニズム連盟と交渉していましたが、当時のソ連側の門戸は固く、一時中座のやむなきに至っておりました。その後十年が経過し、一九七四年に新潟大学山の会との合同隊で当山岳会から四名をソ連邦パミールに送れたことは非常に喜びであります。これはかつての大阪外大山岳会のソ連山岳地域に対する憧憬の火が燃え尽きずに続いていたことを意味するものでしょう。

ソ連邦パミール地域は登山のみならず、古くからシルクロードの要所として知られており、また十九世紀後半のロシアの南下政策、イギリスの北上政策にも密接な関係のある地で、こういった観点から今後この地を研究することも登山により深い興味を与えるものではないかと思えます。

この合同登山を機会に、新潟大学山の会と大阪外大山岳会の交流がより密接になり、日本とソ連のアルピニスト達との友情がさらに大きく発展することを祈ります。

最後に合同登山隊を送るにあたり、物心共に暖いご指導ご協力をいただいた関係諸氏に心よりの感謝の意を表したいと思います。

大阪外国語大学山岳会・会長

丸山忠雄



レーニン峰

パミール登山隊編成

隊長	布施栄明 (四九・新潟大学山岳部部长)
渉外	藤井 洋 (三八・新潟大学山の会)
食糧	江川征一 (三三・新潟大学山の会)
装備	斉藤一弥 (三一・新潟大学山の会)
食糧	佐藤 登 (三〇・新潟大学山の会)
会計	加藤勝久 (三〇・新潟大学山の会)
医療	小松原秀一 (三〇・新潟大学山の会)
気象	角張嘉孝 (二九・新潟大学山の会)
保険	田和芳郎 (二四・新潟大学山の会)
装備	近藤憲司 (二二・新潟大学山岳部)
記録	黒須克巳 (二一・新潟大学山岳部)
ゼネラル・マネージャー	田村俊介 (三七・大阪外国語大学山岳会)
記録	由良 薫 (三二・大阪外国語大学山岳会)
装備	齐藤清雄 (三三・大阪外国語大学山岳会)
食糧	船井総一 (二四・大阪外国語大学山岳会)

●第1章

交渉経過

◆入山交渉 角張嘉孝

新潟大学山の会会員による一九六七年の東部ヒンズークシュ遠征は、たった二人の隊員ではあったが、サラグラール本峰（七三五一m）の第二登、七〇六一m峰、六四二二m峰の初登頂という輝かしい成果をおさめていた。

そのあとをひきついで、新潟から「より多くの仲間を氷河の山々へ」という目的の下、「バミール遠征計画」は六年前に計画された。

この計画は「バミールの盟主、コムニズム峰（七四九五m）を東面、すなわちフェドチェンコ氷河からアプローチすること」を目標として、「対岸の地、ハバロフスク市との姉妹都市友好関係を推進する」ことを

も模索した二面性を持っていた。

すなわち、当時のバミールは一九六二年にジョン・ハントの率いるイギリス隊が西面（ガルモ氷河）から、コムニズム峰に登頂している例があるだけで、バミールはソ連の友好国またはそれらの団体にのみ開放されていたようだが、自由主義圏のアルビニストにとっては未だ禁断の地であった。われわれのバイオニア・ワークはまさにこの点にあったといえよう。

具体的な策としては、一九六六年に、故袋一平氏による横浜山岳会の「日本・グルジア友好交流登山協会」の先例にない相互交流を基本とした。折りからの万国博覧会にソ連ア

ルビニストを招待し、剣春山登山を合同で行ない、その年の夏に、日本隊がバミール山城に入域するというものである。隊員数、費用等はファイ・テイ・ファイ・テイとの条件で、日本側母体は、新潟大学日ソ親善登山協会であった。

六年間のバミール入域のための交渉は、一九六九年秋、日ソ協会新潟支部を通じてはじまった。モスクワにある全ソアルビニズム連盟とコンタクトすることを目的としていた。前年、すでに私は、日本山岳協合理事・丹部節雄氏から、当時J・A・O海外担当委員であった田村俊介氏（大阪外大OB）を紹介されており、併行して田村氏を通じ、全ソアルビニズム連盟とコンタクトをとるべく努力が続けられていた。遠征が実現するまでの五年間、モスクワ滞在中の田村氏との間に、百通近い往復書簡がシベリアの空を通いあった。われわれのバミール登山に関する

許可申請書は、一九七〇年二月、アルビニズム連盟・アヌフリコフ書記長を通じて、ソ連閣僚会議付属体育スポーツ国家委員会議長（パブロフ長官）になされた。「申請者と被申請者の格差（立場）があまりにも違うため、このままではこれ以上の進展は望めない」というアヌフリコフ氏の助言によって、「日本国の政府筋高官の推薦状が必要」となり、文化庁、外務省、文部省等の機関をあたったが、山登りに推薦状などを書く政府高官などいるはずもないとの結論にならざるを得なかった。結局は故松方三郎氏に相談したところ、「石井光次郎氏（日本体育協会会長）が適任であろう」とのことと、さっそく秘書官に会い、日本山岳協会を通じて書類を上程し、日体協国際課（森村五郎氏）を通じて、推薦状をアルビニズム連盟及びパブロフ長官へ提出した。これでわれわれは国内的にでき得ることのベストをつくし

た。

また、ブレ・オリンピック（札幌）にパブ・ロフ長官が来日し、長崎学長、布施隊長が新潟大学バミール遠征隊に許可を降ろすよう懇請した。こうして一九七三年夏まで、「今年こそ行ける、いや来年だ」という状態が続いた。交渉の過程で、われわれの計画は相互招待という形ではなく、日本隊の単独入域という形になった。アルピニズム連盟には財政的余裕がなかったし、日本の山には魅力がなかったことが原因であった。また、

隊員も当初のメンバーの変更が余儀なくされていた。

こうした困難な状況の中で、昨夏、J・A・Cを通じ、新大バミール登山隊事務局へ一九七四年度レーニン山域で開かれる、国際アルペンキャンプの招請状が届いた。この招請状によつて、隊の意見は二分した。それはコムニズム峰に申請していた計画と今回のソ連当局の参加要請内容があまりにも違いすぎる点にあった。フェドチエンコ氷河単独入域とレーニン山域での国際アルペンキャン

プでは同じ七〇〇メートルの山でも、本質的にデイメンジョンが違っていた。各国隊が自主的に行動できるとしても、すでに千人ほどのアルピニストに頂上を明け渡しているレーニン峰へ、わざわざ七五〇ドルも支払って行く魅力がないとするものは、計画当初からかわつていった者に多い意見であった。それはバミールに入域することに固執してきた者にとつて、その程度が強い者ほど、キャンプ・バミールという形で示されたソ連のシステムには強い抵抗を

感じている——といったところに原因があったようだ。しかし大半の意見は、キャンプ・バミールを断わつた場合、いままでの交渉段階で御世話になつた方々に対して問題が残る——といった社会的理由や、あるいは本質的にバミールの山でなくてもよかつたし、とにかく氷河の山に行ける機会の一つであつたと考えられていたようだ。数回の会合の後、エントリーを決定し、十二月にバミーションを得た。

◆ヤルタ岩登り大会

藤井 洋

この報告書は、一九七三年十月二日～九日の間、ソビエト連邦共和国クリミア地方において開催された「青年登山家のための国際トレーニングキャンプ」に参加した記録の概要を簡単にまとめたものである。

この大会については、ソビエト国内として通算六回目（一年おきに開催）、外国隊参加は、一九七一年に次いで第二回目のものであるが、さきの大会にも、日本山岳会の好意により当新潟大学の会々員、横山史郎、角張嘉孝の二名が参加しており

両者の意見なども参考にして概略を述べることといたしたい。しかし、第一回大会に参加した兩名がむしろオブザーバー的であつたのに比し、今回は「ダワイ、ダワイ」のかけ声を浴びて田和、近藤の両君が積極的に登らされたこと、およびキャンプ・バミールの計画の具体化など、実際のな収穫もかなり多く、これらの詳細は八ミリ映画を含めて後日発表し、大方のご意見を仰ぐこととした。

藤井 洋

一九七一年に引き続き、クリミア地方において本年開催された「青年登山家のための国際トレーニングキャンプ」に参加した概要を報告します。このキャンプの参加要請は、ソ連邦アルピニズム連盟から日本山岳会（JAC）にきたものであり、当然に公式の報告をJACに対して行わなければならず、現在これまでのバミール交渉経過の整理を含めて報告書を作成中であります。とりあえず一九七四年に「国際キャンプFair '74」が開催され、エントリーをする段階にきておりますので、経過およびモスクワでのバミール交渉をご報告し、山の会各位のご意見をいただきたいと思います。

したがって、この報告書は、本大会参加に多大のご尽力を賜つた

各位に対しては、はなはだしく礼を欠き、意を満たさないものであると思ひますが、さきに開かれました総会の議事録をご参照下され、今後ご批判をいただき、さらに検討を重ね、より充実した本会の運営に資することができれば幸甚であります。重ねて山の会各位に心から謝意を表し、合わせて忌憚のない意見をお寄せくださるようお願いいたします

昭和四十八年十一月一日

新潟大学の会々長

小林 兼 一郎

クリミア大会参加代表

藤井 洋

I 行動概要

1 参加者

藤井 洋 (昭三六年卒、三六歳)

田和芳郎 (昭四八年卒、二二歳)

近藤憲司 (工四年、二二歳)

2 日程

一九七三年

九・二八 新潟空港発の予定、航空機事故のため新潟に宿泊。

九・二九 羽田空港からハバロフスクへ(ウクライナホテル)

九・三〇 日曜日のため、アルピニズム連盟および田村氏と連絡とれず。市内観光。

十・一 ア連盟に連絡、体育省・儀典部の人の案内により、メトロポールホテルへ。藤井、田村氏に同道していただき、閣僚会議付属スポーツ委員会副議長ウラディミール氏およびアルピニズム連盟事務局長アヌフリコフ氏と面会。さらに一九七四年バミールキャンプ担当のモナスティールスキー氏と会見(バミールの情報聴取)。

十・二 他の外国隊とモスクワ・ヴヌコヴォ空港からクリミア半島シンフェロポリ空港↓ヤルタ近郊クロオスの宿舎。

十・三 黒海に面したクリミア山系の各岩場の説明。ヤルタ市内観光。夕刻岩登りトレー

ニング(田和、近藤参加)翌日の登攀ルート検討。

十・四 外国隊のアイ・ペトリ山登攀。田和、近藤のパーティーは、スポーツマスター・ヴイクトル氏一行に続いてマルシルート(登攀ルートの意)へ、日本人として初完登。

十・五 ヤルタ近くの岩場でコンベティションのためのトレ

ーニング(外国隊)。ヤルタを経て帰省。

十・六 コンベティション(競争)開始。田和、近藤他の外国隊に混じて「二人登り」に参加。

十・七 観光(ヤルタ会談ゆかりのアルプカ宮殿、現博物館およびサナトリウム、その他)

十・八 午後クリミア・スピヤスカ(ジョイントで登ること)をやるためのルートファイディングおよびソビエトの大会見学。午後から雨のため競技中止。晩さん会。交歓。

十・九 クリミアをあとにしてモスクワへ(メトロポールホテル)

十・十 モスクワ市内、グム百貨店等でショッピング。夜、田村氏に招かれ田村家へ。

十・十一 午後六時半モスクワ発。

十・十二 午前十時半羽田空港着。

II バミール登山に関する交渉概要

1、モスクワにおける「キャンプバミール」の内容打合せについて

(1) 外国招へいは「世界アルピニズム連盟」に加盟している各国に行っており、キャンプのリミット一五〇名(予定)に達したら打切る。

(2) 十月一日現在、日本は八番目の国で、一〇〇名に達している。

(3) 登山形式は、ソビエト・スポーツマスターのコンサルタン

トにより、各国の自由意志で、レーニン峯周辺(アライ谷)のピークを単独パーティーで登る。

(4) 食糧はソビエトで用意をし、装備を持参すること。

(5) 資料は各国に別便で送る。(受取り済み)

(6) 正式エントリーはできるだけ早く行なうてほしい。

2、従来われわれが行ってきたフエドチェンコ氷河周辺のコムニズム峯リポリツェ、カルモ等の要請との関連について。

(1) 本質的には、われわれの要請はなおざりにされ、全く異なつたものとして計画されたキャンプである。

(2) フエドチェンコ氷河に今回行

くことは原則的に考えていない。(一九七五年にキャンプをするとのアヌフリコフ氏の発言あるも信頼性乏し。)

(3) しかし、フエドチェンコ氷河に今後とも入城できないとは云つてはおらず、われわれの経緯を考慮して概ねつぎの如き印象を得た。

(A) キャンプバミールを外交的な場としてある程度評価し、これに参加する際にフエド

チェンコ氷河入城の意志を伝えるべきである。

(B) 今回支払う金額一人当り七五〇ドルはかなり高額である旨を理解させ、スポーツ

コミティ副議長コバル氏を通じてアルピニズム連盟も真剣にフエドチェンコ入城を考慮するよう圧力を加える方法もある。

III クリミア大会における感想

1. アルピニズム(岩登り)に対するソ連邦の基本的な考え方

(1) 岩登りにおいては、スピードが安全のための重要な要素の一つである。

(2) このためには、ヨーロッパで使われているピプラム底の革ぐつは重過ぎて不適当である(実際にはゴム短ぐつを使用)

(3) 岩登りを含めて、アルピニズムとは、温暖、快晴で最も条件のよい時に完全に早く登るのが至上のものであり、その意味でこそ完全にスポーツとして存在するものである。すなわちスポーツである以上早さを競うのは当然である。

(4) したがって、積雪期や雨天にはどうするかという質問に対しては興味を示さずなぜ外国では競争を行わないのかと逆に不思議がっていた。

(5) しかし、一部ヨーロッパアルプスの経験者や、カフカズ、パミールの経験者の中には、ヨーロッパ的思考をする者もいるが、実際には発表の場を与えられていない。

(6) ソ連邦アルピニズム連盟では、ソ連式の岩登りを行ない、大会参加を通じて外国でも同様な競技会が開催されいづか国際的な大会がもたれることを願っている。

2. ソ連邦の岩登り技術等について

(1) 各共和国では、本大会出場のため、あらゆる方法で訓練を行っており、全選手とも非常に高度な技術を持っている。

(2) トレーニングでは、スポーツマスターの管理の下に、あるひ

とつもの（例えばチムニー登り）を完全にマスターしたのちにつきの段階（例えばクラック登り）へ進むというような方法をとっており、グレードの概念もこの方法に基づいて生れたものと考えられる。

(3) アルピニズムのうち、とくに岩登りについては、スポーツマスターの手による教程書が作成されており、これによって一定の採点を行なっている。（この教程書は露文のものをもらってきたので、和訳して参考に供したい。）

(4) 各グレードの基準は日本よりもかなり高度である。

(5) 各選手は相当に多量のトレーニングを消化しており、握力、腕力、脚力等の基礎体力に優れ、指には「岩登りタコ」ができている。

(6) 岩場におけるトレーニングでは、4〜5ミリのワイヤーロープを滑車でするして確保をしたうえ、フリークライミングを主体として行っている。

(7) クライミングには豊富な体力を利して、強引とも見えるような腕力とフリクションの利用により、すばらしい早さで登る。

(8) ジョイントで登るルートには、残置ハーケン是一本もない。こ

れは日本と比較した場合大いに見習うべきことである。

(9) 人工登はん用具で金属性のものは、ハンマーを除きほとんどのもの（ユマール、アブリミ、ブランコ、ハーケン、カラピナ等）はチタン鋼でできているが、これを利用できる者は、軽さを要求される者すなわち、競技選手およびスポーツマスターに限られているようであった。また、カフカズの登山基地には、鉄製のハーケンその他すべての登山用品が備えられており、アルピニストはこれらを借りて登山を行ない、消耗したもの以外を返すことになつていふという話であった。

(10) 金属性の用具以外はウール、羽毛品は別として、一般にお粗末であり、高価のようであった。また、ザイルは、ナイロン製を用いていたが、個人所有ではなく、驚くべき早さで下降するアブザイレンにも用いるにしては、長さはともかく（八〇m以上、9m m）かなり古びていた。

3. 今後の方向（個人的提案）

(1) 日本で競技会を行うことについて、他に専門の委員会等を設けて検討を加えるとしても、現在実行できるつぎの事項は、直ちに取り入れるべきものと思

う。

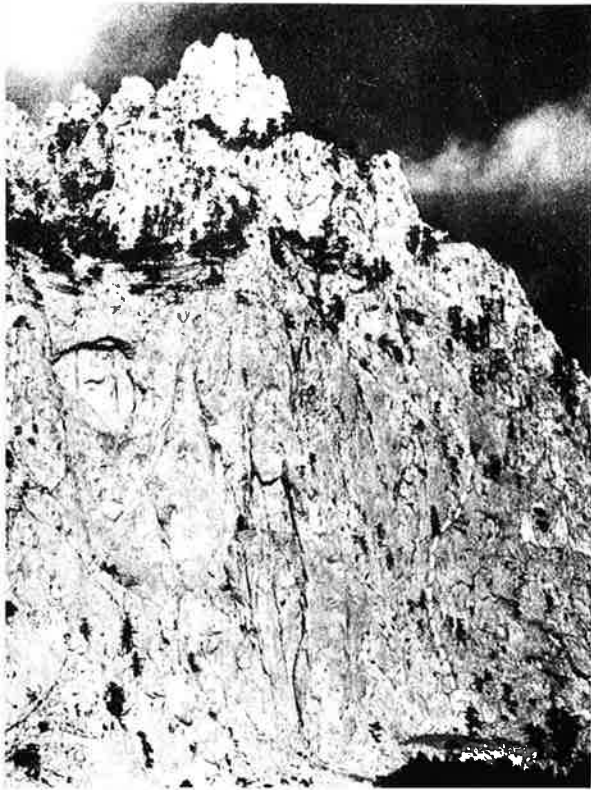
(A) 縦走、岩登り、冬山、沢登り等各山行を想定し、それに合った基礎体力養成のためのトレーニング要項を策定する。

(B) 必要によつて上記のためのトレーニング・センターを設立する。（とくに登山が国民体育として普及していることを考慮するならば明確なスポーツとしての位置づけのためにもぜひ必要であろう。）

(C) とくに岩登りにあつては、安全と技術修得のために、適当なグレンドを利用して、ソ連式のワイヤー・ウインチを採用すべきであろう。

(2) 国民体育大会における山岳種目の競技化および登山のスポーツとしての位置づけ確立をふまえて、ソ連式の競技会を日山協関係者が視察するのも有意義のことと思う。（因みに、一九七五年には男三人、女二人のチームを招く予定とのこと）

(3) 今回の参加要請は、世界アルピニズム連盟に加盟している各国に出されており、日本としてはJACが当初から加盟していたために、JACあてに来た文書を、たまたま新潟大学がパミール交渉をソ連邦と行なつてきた経緯があり、JACのご厚意



(中央壁)

により代表として出場したものである。しかしソ連邦としては、これを単に連邦内大会にとどめず、国際的大会への発展を意図しており、日本へ帰ったらその趣旨を宣伝するよう要請された。

したがって、これに対する何らかの方策もいずれば立てなければならぬものと思う。

(4) 東欧諸国及びオランダ等にはある程度スポーツ化(競技化)の動きがあるようである。

4. 参考

(1) 参加国—ソ連邦各共和国

その他—東独、ハンガリー、ブルガリア、チェコ、ポーランド、オランダ、アメリカ、日本

(2) 競技方法

一九七一年の要項、別掲のとおり。

5. その他

大会のふんい気は、友好的であり、とくに遠来の日本に対しては、ジョイントで登ったアイ・ペトリのマルシルト(ルートの意)をヤボンスカヤ・マルシルトと命名するなど、最大限のサービスをしてくれた。大会終了後、ソ連邦のジャーナリストにコメントを求められ、日本の状況を話すとともにソ連への讃辞を述べた。幸い大会の様相を8ミリフィルムに撮ってきたので、何かの機会に発表することといいたたい。

IV クリミア大会参加会計報告

1 収入

山の会募金 ※二一〇、〇〇〇円
個人負担 五四九、六九〇円

2 支出

渡航費 六七七、六二〇円
渉外用土産品 一一、八二〇円
通信費 一五、〇〇〇円
写真(フィルム・プリント) 一三、〇五〇円

装備費その他 一、二〇〇円
東京—新潟間旅費一〇、〇〇〇円
旅券 一八、〇〇〇円
その他雑費 一一、〇〇〇円
計 七五九、六九〇円

(一九七三年十一月一日現在)
※なお、これ以降、数口のご寄付をいただいております。(詳細は追ってご報告します。)

一九七一年度

ソ連邦ロッククライミング

選手権試合に関する規定

一、目的および課題

ソ連邦選手権試合はつぎの目的で行われる。

ロッククライミング技術における選手の達成状況

ソ連邦のスポーツ組織におけるロッククライミング発達に関する経験の交換

国民中のロッククライミングと

アルピニズムの大衆化

二、開催時および開催場所

一九七一年十月二日より八日まで、「クリミア岩」にておこなわれる。選手団の到着は十月一日ヤルタ市へ。

三、競技の指揮

競技の指揮は、ソ連邦アルピニズム連盟によって行われる。

競技の直接的な挙行は、ソ連邦閣僚会議付属体育とスポーツ委員会アルピニズム部によって認められた審査委員会によって行われる。

競技場所の準備、配置、食事、参加者、团长、審査員の出迎えと見送りはクリミア州体育とスポーツ委員会が行う。

四、参加者の構成

競技に参加するのは「体育とスポーツに関する委員会」の申請にもとづいた市単位の選手団である。

競技の参加の許されるのは、一九七〇年と一九七一年の市選手権で良い成績を納めたスポーツマンのうちから「ロッククライミングまたはアルピニズムにかんする熟練者候補」以上の等級をもち「体育とスポーツにかんするしかるべき委員会」によって証明された調書のコピーによって確認されるスポーツマンである。

(注)一九七〇年、一九七一年に競技を行わなかった委員会は一九



ヤルタの岩壁

七一年ロッククライミングソ連邦選手権大会への参加はできない。

(団)の構成は六名、うち男三名、女二名、団長一名

(団)は、同一の制服、スポーツ組織の旗、しかるべき装備を身につけていなければならぬ。装備の名称および数はチーム独自に決定のこと。

五、選手権大会プログラム

競技は男子三種目、女子二種目でおこなわれる。

(a)男 参加人員 合格

1 二人競走 三人 二人

2 個人クライミング三人 二人

3 クリミヤ 一スピヤスカ

スピヤスカ (二人)

一スピヤスカ

(b)女

1 二人競走 二人 一人

2 個人クライミング二人 一人

(注)クリミヤスピヤスカ競技には参加者は各人八磅重量のリュックサックを所持のこと。

六、種目別参加条件

1 二人競走には全参加者が参加

のこと。

2. 個人クライミングの参加の許可されるのは、

a、二人競走の勝者

b、この選手権大会の第一種目の競走で勝者の中に入らなかつた一九六九年のチャンピオン

c、二人競走で破れたものうち優秀な成績の女子五名と男子十名

3. クリミヤスピヤスカ種目に参加できるものは、

一チーム 一スピヤスカ(二名)

七、参加者ならびに審査員の受入れの方法と条件

審査員の派遣、迷路の準備と設備

競技の挙行、到着日と競技期間中の参加者の食事の確保、競技場所までの輸送と配置に関する費用はソ連邦閣僚会議付属体育とスポーツ委員会が負担する。

クリミヤの居住地区までの往路とそこからの帰路の参加者ならびに団長にかかる経費は派遣団体の負担するものとする。

八、勝者の合格と決定
競技参加者の所持するものーパスポート、ロッククライマーまたはアルピニスト手帳

競技は、一九七〇年の補則による一九六六年の規定にしたがっておこなわれる。

全チームの合格者は、個人クライミングと二人競走種目で男子二名、女子一名、男子スピヤスカは一スピヤスカの成績優秀者がえらばれる。

スピヤスカによりよい成果を示したチームには均等に優秀賞が与えられる。

個人賞は各種目別に個々に与えられる。

二人競走

個人クライミング

クリミヤ、スピヤスカ、

クライミング

女子

二人競走

九、表彰

第一位を占めたチームにはソ連邦閣僚会議付属体育とスポーツ委員会”の優秀賞と第一級証明書が与えられる。

第二位、第三位のチームには、同様に第二級、第三級の委員会証明書が与えられる。

個人クライミング種目の男子、女子優勝者とスピヤスカの男子クラ

イミング優勝者には一九七一年度ソ連邦チャンピオンの称号が与えられる。

また、彼らには第二級メダル銀ならびに金メッキ製とチャンピオン証明書が与えられる。第二位、第三位を占めた参加者には同様に銀製とブロンズ製メダルならびに二級、三級証明書が与えられる。

二人競走の勝者には委員会の一級から三級までの証明書が成績にしたがって与えられる。

総合成績で最上位を占めた男子および女子には一九七一年度ロッククライミング多種競技ソ連邦チャンピオン”の称号が与えられ、二級のメダル(銀と金メッキ)のチャンピオン賞が与えられる。

ロッククライミング多種競技ソ連邦チャンピオンと勝利チームを生んだトレーナーには、メダルと委員会証が与えられる。

十、申請

参加申請は、一九七一年五月十五日までにソ連邦アルピニズム連盟と同部あてに提出のこと、規定のフォームによる氏名申請は一九七一年の十月一日一七時まで審査委員会あて提出のこと。

ソ連邦アルピニズム連盟(一九七〇年九月三十日、ソ連邦体育スポーツ委員会によって確認される)

●第2章

登山記録

◆キャンプ・パミール'74の組織

田村俊介

今回の第一回国際パミール・キャンプはソユズ・スポルト・オベスベイチェニエ(全ソ連スポーツ物資供給局)とソ連アルビニズム連盟との合同主催によって行なわれた。

ソユズ・スポルト・オベスベイチェニエは全ソ連邦のスポーツ団体に物資を供給する供給局である。今回のパミール・キャンプでは、この供給局は、ソ連アルビニズムの要請または依頼により、ベースキャンプの設営、装備・食料の供給、山での交通および連絡機関となる車やヘリコプターの手配等を行なうのが主たる業務であった。われわれもパミール・キャンプへの参加費用をこの供給局に払ひこみ、この外貨でパミール

・キャンプが準備された。またこのうちの何%かの収益はアルビニズム連盟のヒマラヤ遠征費用に当てられるということである。

余談になるが、ソ連の海外登山はこれまですべて合同登山または交換登山という形をとっており、単独で海外登山を行なった記録はない。ソ連では寄付金を集めるといふことはできないし、相手が国家または人ではない自然が対象の登山という行為には、勝つたとか負けたとかいう結果も、数字で表わされる具体的な成果も得られないこともあり、国から外貨資金を得ることが非常に困難なようである。従って、今回のような国際パミール・キャンプを開催し外貨

を獲得するのも、ヒマラヤ登山を行なうには必要なことであるらしい。しかし、このパミール・キャンプは、ソ連側では山岳オリンピックと名づけており(外国隊はそのような名称には全くこだわっていないようであったが)、やはり登山を通じての友好というのが第一義であったと私は思っている。

パミール・キャンプでの事務処理をすべて行なった事務局長のモナスティリスキイは、このソユズ・スポルト・オベスベイチェニエから派遣されて来た人である。モナスティリスキイ事務局長の他数名の人がモスクワから派遣されて来ており、食料調達、テント設営などの仕事を行なっている。事務局の最も繁雑でその大部を占める仕事は、食料調達であったようである。何しろ外国隊員総数一七〇名とソ連側の関係者約三〇名の一カ月間の食料を、ベースキャンプより約八〇キロはなれた、アラ



*行動日程

七月一三日 全員モスクワに集合

七月一四日 オージン、ダラウト・クル

ガン經由ベースキャンプ(三七〇

メートル)に入る

七月一六日 開会式

七月一七日 クルイレンコ・ルート

g(四二〇〇メートル)設営

七月二二日 g(五〇〇〇メートル)設営

七月二三日 地震による雪崩により

g、デポ資材流失

七月二四日 全員ベースキャンプへ

下る

七月二五〜二八日 悪天候と休養のため、ベースキャンプに滞在。今

後の登攀ルートについて検討し、



ベース・キャンプ

イ谷のダラウト・クウルガンや近くのユルタよりトラックで調達して行くのである。このために大型トラックが二台常備されていた。食料関係ではモスクワから派遣されて来た人の他に、調理小屋で働く料理人、食堂テントで料理を支給する人達が約一〇人ほどいて、その半数は現地雇者である。しかし高度三八〇〇メートルのベースキャンプでの作業は山になれない現地雇者には、相当きびしいようで、途中で山を下る人

が出て、モナステイリスキイを困らせていた。

ソ連側でベースキャンプに設営された小屋やテント群は大規模なものであった。二人用の外国人用テントが約百張、前室のあるソ連人用テントが約二〇張、調理小屋一家屋、集会用および約六〇人が一度に食事のできる食管用超特大テント各一張、食料保存用大テント三張、十人用男子トイレ小屋、女子用トイレ小屋、六人用シャワー小屋各一である。また自家発電所もあり、各小屋には四〇ワットの裸電球が付けられている。中央広場の照明用に数十本の柱にも電球が付けられている。このテント群の中央の広場には十カ国の国旗掲揚台が設けられ、各国の国旗がかかげられている。

一方、アルピニズム連盟の主たる仕事はトレーナ隊の編成である。このトレーナ隊は外国隊に登山上のいろいろなアドバイスをしない、遭難が発生したときに救助作業を行なう。トレーナ隊の隊長（パミール・キャンプ本部長）はウイタリイ・アバラーコフ（六八歳）である。アバラーコフの下にはクレツコ、ポリシヨノック、ギベンレイテル（兼英語通訳）、チェルバーノフらのソ連の代表的なアルピニストが数人トレーナとして働いている。

連盟選抜女性隊が組織され、彼女達は外国隊の行動を間接的に観察しながらレーニン峰に登頂することであった。

実際のなトレーナ隊の活動は、当初は外国隊が主としてクルイレンコ・ルートとラズジェリナヤ・ルートに二分されたので、二隊に分かれて同ルートを外国隊と同時に登ることであった。しかしアメリカ隊の遭難が起き、トレーナ全員はこの救出作業に従事した。その後悪天候と雪崩の危険のため、クルイレンコ・ルートに向った日本隊を含めた、外国隊はルートを変更したので、クルイレンコ・ルートに向う予定のトレーナ隊も外国隊にあわせリブキン・ルートに変更した。

結局、トレーナ隊はベースキャンプのアバラーコフの本部隊、ラズジェリナヤ隊、リブキン隊に分かれそれぞれ行動した。しかし、悪天候によるスイス女性隊員の遭難、女性選抜隊の遭難が発生し、トレーナ隊はその連絡と救出にかかりきることになってしまった。

今回を含め、これから毎年開催される予定の国際パミール・キャンプでは、外国隊の主体性にまかされた登山をソ連側は希望しており、ソ連トレーナ隊の仕事は外国隊に対するアドバイスと遭難が発生した時の救助隊の編成になるだろう。

リブキン稜ルート、ラズジェリナヤ峰ルートから、レーニン峰をアタックすることに決定

七月二九日 レーニン主氷河に新しくq（四三〇〇メートル）設営。

七月三一日 リブキン隊_Q（五六〇メートル）設営

ラズジェリナヤ隊_Q（五三〇〇メートル）設営

八月二日 ラズジェリナヤ隊、ラズジェリナヤ峰（六一四八メートル）へ登頂

八月三日 ラズジェリナヤ隊、_Q（六〇五〇メートル）設営

八月四日 リブキン隊、レーニン峰アタックの行動開始。_Qへ入る。

八月五日 リブキン隊、_Q（六六五〇メートル）設営

ラズジェリナヤ隊、レーニン峰アタック、悪天候のため六九〇〇メートルにて登頂断念

八月七日 ソ連女性隊遭難

八月八日 リブキン隊、レーニン峰（七一三四メートル）へ登頂

八月九日 qを撤収し、全員ベースキャンプへ入る。閉会式

八月一日 パミール地方に地震発生

八月一三日 ベースキャンプ発、サリ・タシ、オーシを経てモスクワ

八月一七日 本隊、モスクワ発、帰

国。

◆レーニン峰登山記〈リブキン稜 直上ルート〉

近藤憲司

ソ連ではキャラバンというものが省略されている。雑務と往復のキャラバンに軽く一カ月は取られるようなヒマラヤにおける登山とはかなり異なっている。なにしろ、私達に許可されたソ連滞在期間は一カ月であった。七〇〇メートルの高所経験者を持たぬ私達としては、この一カ月という一日の延長も許されぬ、期間内での高度順応に対する不安を当初から抱かぬ者はなかった。

共産国の融通性のなさは入国して後、出国するまで常に私達を悩ました最大の種ではあった。ソ連の受け入れ体制はおおむね万全であった。モスクワペースキャンプ間はセツト旅行さながら、交通機関はすべて予約され、私達はただソ連の担当者についていさえすればよかつた。モスクワ市内観光というおまけまでついていた。もちろん、私達にスケジュールの変更は許されない。

七月一日、モスクワに用意されたホテルに全員集結。輸送担当の近藤、黒須の両名は一足はやく九日にモスクワ入りし、別送した八五〇キロの隊荷の通関のために、幾度とな

く空港に足を運んだが、結局手続きはソ連アルビニズム連盟が行なうことになり、兩名の仕事は確認のみに終わった。

七月一日、ドイツ隊の不祥事から三時間も遅れて、参加者の第二団として私達を含めた約六〇名の登山者に乗せた飛行機は、午前三時、中央アジアの都市オーシに向けてドモジエドボ空港を飛び立つた。

オーシ空港にてキルギス共和国代表と子供達の花束の歓迎を受けた後、小型ジェット機に分乗し、北バミール地方アライ谷の中のダラウト・クルガンへ、ここより四輪駆動のトラックで、アチクタン谷三七〇メートルのペースキャンプに向う。このあたりで見かける人々はモンゴル系の顔を持ち、途中にホッソンポイントとする遊牧民のバオが中央アジアの旅情を感じさせた。四時半、やつと激しい上下動のトラックの荷台より解放された。実にモスクワをたつて丸一日のペースキャンプである。ここにはすでにソ連側の用意によつて、全参加者数分のテントが整然と設営されており、食堂テント、ト

イレ、シャワーまでも作られていた。辺りは高山植物が咲き乱れ女性的な姿のレーニン峰が純白のドレスをまとい、静かに私達の前に横たわつていた。

モスクワから二四時間というはやいで三七〇メートルの高さに上昇したせいか、隊員全員が急激な脈拍数の増加をみた。はやくも軽い頭痛や無気力を訴える隊員も現われた。参加者は世界各地十カ国より集まり、総勢は一七〇人。ちらほら女性クライマーの姿もみえ、カラフルでにぎやかな、そして下界の空気をやや残しているペースキャンプだった。

アメリカのジョン・エバンス、オーストリアのウルフガング・アクスト、イングランドのダグ・スコットなど、有名な登山家の顔もみえた。さつそく長旅で疲れた体をほぐそうと、陽気で気さくな外国人クライマー達とサッカーを興じる。サッカーは彼らのお得意だった。

翌一日より、装備の整理、食糧調達などの準備と平行して、最初はセーブし、徐々に荷の重さを増しながらレーニン氷河上のらへ向け偵察および荷上げを開始した。

食糧は十分ペースに用意されていたが、調達はその日ごとの行動予定を提出、しかもロシア語でという大変な手続きを経ねばならず、容易ではなかつた。ロシア語の達者な田村

隊員がいなかつたら、どんなものを食わされていたかわからない。

ここでは全くのシェルパレスなので、全員がポツカを行ない、同時に能率的に高度順応を推し進めなければならぬ。複雑なローテーションは首脳部を悩ました。タクテイクスの未熟さも隠し得なかつた。布施隊長も自ら荷上げ作業に加わり、慣れぬ高度の不安に怯える隊員は大いに励まされた。

ルートはレーニン氷河上のクルイレニコ東氷河よりクルイレニコ峠を経て東尾根より向う。このルートはレーニン峰のバリエーションではあるが、一般ルートのラズジェリナヤ峰經由とならび容易なルートである。しかし、長大な東尾根を縦走しなければならず、クルイレニコ峠への急雪面の通過は特に注意を要する。参加パーティの大半は、ラズジェリナヤ峰經由ルートを計画していた。

私達はタクテイクスの基本的構想として、クルイレニコ峠のすぐ東にある六一〇〇メートルのスパルターク峰に二週間以内に全員登頂し、あわせてクルイレニコ峠に予定しているらへの荷上げ、六〇〇〇メートルの高度獲得を前半の目的とし、後半休養をとつて可能な限りの人数を頂上に立たせるといふものであった。短期間の高度順応に悲観的観測もなされたが、登頂者は順調に行けば十

●外国隊の活動●

国名	参加人数	パーティ数	登頂ルート(月・日)
オーストリア	61(2)	4	北西稜(7・24)
フランス	16	2	リプキン稜北西稜縦走(8・3)
オランダ	6(2)	1	—
イタリア	15	1	リプキン稜(8・8)
日本	2	1	—
リヒテンシュタイン	10(2)	1	北西稜(7・31)
スイス	12	2	北西稜(8・4)
英国	17(2)	4	北西稜(8・1)
米国	21(1)	3	北西稜(8・2)
西独			北西稜(8・1)

()内は女性

名を予定していた。
ベースキャンプを出て、一面緑のカーペットに覆われた平坦なアチクタシ谷をさか上り、一度支流を渡渉すると、一時間で「ネギの原」である。ネギが一面に生えており、私達の食事にもこの新鮮なネギの香りが加えられた。ここから遠くユーヒン峰より伸びてくる尾根の支尾根を越える。

トラバース気味に一時半登ると、四〇七五メートルの「探検家の峠」と呼ばれる尾根上に立つ。眼下にレーニン氷河が開け、クルイレンコ峠へと続いている。レーニン峰はすぐ近くのようにみえ、また大きいとも感じ、まだこの山のスケールがつか

めない。「探検家の峠」よりさきほどの登りとほぼ同じ高度差をトラバース気味に下り、脇よりレーニン氷河に入る。はなはだ不経済なルートであるが、レーニン氷河末端よりつめるという考えは、海のように続くモレーンで黒く汚れた氷河の波の複雑な形状をみれば、放棄せざるを得ない。モレーンを登ると、まもなく白い氷河の上に出る。

ここから、声をかけ合いつつ、つきつ離れつついた外国パーティの多くとはわかれ、レーニン東氷河上のQ予定地へ向う。すぐだと思つていたQへの道は氷河の気まぐれな凹凸を幾度となく上下せねばならず、うんざりするほど長かった。道は迷

路のようで、二度とは全く同じところを通ることがなかった。ベースとの往復はたつぷり一日かかるが、午後九時まで明るいのは都合が良かった。

三日目の七月一七日に高度四二〇〇メートル、レーニン東氷河の脇のモレーン上にQが建設され、引き続き翌日よりQへのルート工作が小松原、田和の両隊員により、トッブを切つて開始された。アメリカ、フランス、イングランド、ソ連、それに日本の五パーティが時を同じくしてこのルートに上がってきた。フランス隊は北稜東面の未踏リッジを、アメリカ隊はクルイレンコ峠からラズジェリナヤ峰への縦走を、イングランド隊はクルイレンコ峠越えて、南より旧モスクワ・ペキン峰を計画していた。ソ連隊は私達と同じ計画のようだった。

Qを出発して、氷河上を一時間ほどのゆるい登りが終わると、傾斜はしだいにその強さを増してすぐにアイスフォールにさしかかる。そう大きなものではないがやはり注意を要する。美しい造形を作り出しているセラック帯を脇にみながら、回り道のこみいったルートを慎重に一歩一歩踏み出る。一カ所、フィックスを行なつただけで複雑ではあるけれど、一度トレースがつけられれば大きな困難はなかった。このアイスフォール

ルを越えると、次は底無しに深いクレバスが数本走る地帯に入る。最も不気味で日を重ねるに従い、その口を大きく開いていくように思われ、通過するたびに胸をなでおろした。

後ろを振り返ると、レーニン氷河が足元から下流に流れ、小さく見えるQのテントは覆されているかのようだ。高度四六〇〇メートルのプラトリーである。ここよりまもなく一気にクルイレンコ峠につき上げる急登にさしかかる。一足はやい他のパーティによつてすでにトレースがつけられ、ラッセルの負担はなかったものの、モスクワをたつてまだ一週間という私達にとつて息は荒く、足は高度に比例し重くなる。傾斜三十度、高度差一二〇〇メートルの頭上へのしかかるような雪面は雪崩の不安に隊員の気持をひきしめる。ソ連人トリーナーのいうように、ほんとうに起らないのだからかとの疑問を残しながらも、他のパーティも登つているといふ事実、高度順応、荷上げへのあせりがそれを置きざりにさせていた。入山以来、日中は比較的好天が続き、雪面の照り返しは強烈で、早くも一皮むけそうな気配。しかし夕刻には毎日のようにわか雪が降り、私達は「定期便」と呼んだ。

七月二二日、大斜面の中ほど、クレバスのところどころに五〇〇〇メートルのQが建設された。この日、イン

グラント隊ははやくもクルイレンコ峠に達した。翌二三日、クルイレンコ峠に達すべく、五人の隊員がQを出発した。昨夜の降雪は一五センチの積雪をみた。五三〇〇メートルのアメリカ、ソ連隊のQのある第二クレパスまで登ったが、隊員一名が昨夜チェーン・ストークスを起こしてあり、アメリカ隊のJ・エバンスらの雪崩の危険大との忠告もあり、デポを残してQへと下った。Q入りするため上つて来た四名と四六〇〇メートルのプラトーで合流、この場での長い議論が結果的に幸いした。

上を下つて来る四人のアメリカ人達をみていた江川隊員が、様子が変だというようなことをいった。見上げると急にガスがたち込め広がってきた。奇妙な音が近づいてくる。

「雪崩だ」 誰かが叫んだ。

「逃げる、左だ」

生命への危機感が全身を走り、雪の上をピッケルだけを握つて夢中で走った。振り返えれば三〇メートルと離れていないところをかやりの速さで流れていた。テントのようなものがちらつとみえたかと思うと、ますます消えた。

「大きい。えらく大きい」そう感じた。幸運にも私達はきわどいところで難を逃がれ、互いの無事を喜びあった。しかし、すでに下つていた四人は、Qに残っていた七人のアメリカ

カ人が心配された。角張隊員ら三名はQに急告すべく下降を開始、残る六人でアメリカ人を発見、救出に向つた。彼ら四人の逃げ足もはやく、あの位置ながら一人が巻き込まれて負傷した程度にとどまった。この雪崩がマグニチュード七もある地震によつて引き起こされたものだと後はで知つた。

降り出した雪はやまず、Qは白く塗りこめられていた。上に残つていた七人の安否はすでにベースでも非常に気づかわれていった。雪崩の規模は、誰にも不吉な予感を与えた。しかし彼らは運命の糸に釣り上げられるが如く、奇跡的な生還をした。はたして雪崩はクルイレンコ峠直下より発生し、斜面上のキャンプはすべて流された。発生と同時に七人はクレパスの中に飛び込み、負傷を負いながらも危うくその命を拾つたのだつた。

「雪崩は頭上を滝のように流れていった……」

彼らが雪の降りしきるQに突然帰つたときは泣きながら抱きあつた。急報するためにベースへ急いでいた齊藤(一)、田和両隊員にトランシーバーで連絡がつけられたことは、重い空気に沈むベースを喜悅させた。

私達は、この雪崩によつて、Qの装備、日本食の全てを失つた。この大事件の興奮もさめやらぬうちに、

今後の行動予定を決定すべく早急にミーティングが展開され、とにかくクルイレンコ峠經由ルートは取り止められた。

翌二四日、Qを撤収してレーニン西氷河上にデポし、夜には全員がベースに集結した。早くもこの日、オーストリア隊の三人がレーニン峰登頂との報が入つた。ワインを抜いて大騒ぎしている彼らと出鼻をくじかれた私達とは対照的だった。みぞれは雪に変わり、ベースキャンプもすっかり白くなつた中で、ミーティングのため遅くまでテントには灯がついていた。

七月二五日、昨夜から降り続いた雪は二〇センチの積雪をもたらし、ソ連製のテントはバタバタと倒れた。屋に「第一九回党大会峰に取りついていたアメリカ三人パーティーとフランスの二人が遭難か」という情報がベースに流れ、午後にはアメリカ人一名死亡を知つた。星条旗が半旗にされ、ベースは悲しみに包まれた。

その後、フランスパーティーは無事で帰り、引き続きクルイレンコ峠にいたイングラント隊も全員無事で帰り私達に愛嬌をふりまき余裕をみせていた。残つているアメリカ人を救出するため救援パーティーが組織され日本隊からも佐藤、江川両隊員が参加することになった。しかしこの兩名は予備隊にまわされ、主にアルプ

スのガイドからなるパーティーが第一九回党大会峰に向つた。ソ連本部長より天気が回復するまで行動を禁止するという通告が発表された。

この間にも今後の計画について幾度となくミーティングが繰り返された。しかし、それぞれの主張が激しくぶつかりあうばかりでいつこうに意見の一致はみられず、登攀リーダーであつた藤井副隊長への一部の隊員からの不満も強く、彼は辞任した。意見は決裂し、隊を二分する以外に解決法が見出し得ず、結局、隊を二分しそれぞれの希望ルートを登ることになった。ラスジェリナヤ峰經由ルートへ四人、リブキン稜より直上するルートへ六人が向い、残る隊員は両パーティーに協力という形になつた。リーダーは前者に齊藤一弥、後者に佐藤登隊員が選出された。装備の大半を失い、残り時間もあと一五日となつた私達としては、この際六〇〇メートル峰を確実に落とそうという考えも出たが、魅力的なピークもなく、やはり、全隊員の気持はレーニン峰にあり、やれるところまでやるという結論になつた。足りない装備はソ連や他国の登山家達の友情を得、借りることが出来た。ヒマラヤではかような甘い考えは許されない。この日の午後遅く、新Qを建設するために小松原、加藤、黒須の三隊員が一足早く出発し、再行動

の火ぶたが切られた。雪崩後、ベースに集結して四日目、七月二十八日のことだった。

レーニン主氷河上四三〇〇メートルに新Qが設営され、七月三十一日、Q予定地に向った。雪の詰まったりブキン岩のガリーを登ると、すつかり雪に覆われたリブキン稜に出る。三段になつた雪の尾根を登り、五三〇〇メートルのプラトリーに入る。Qはもう一段上のプラトリー五六〇〇メートルに雪洞が掘られた。まだ順応の遅れている私達には苦しい作業だ。秀れたテントも失し、強引、無謀ともいえるほどの軽装ゆえ、雪洞だけが頼りだった。装備の貧弱さだけではない。残された日数と荷上能力との関係からも私達にとつてこれは唯一の方法だった。登攀隊員六名の他にQまでは江川、田村、由良隊員の協力を得、ここ数日の好天で順調に荷上を行い、八月一日、二日の二日間、計七人が六五〇〇メートルに達し、Qでの休養に入った。リブキン稜から北稜ヘトラパスするルートに登るソ連女性隊八人とは、途中会つた時には、水を分け合つたり、私達の荷が軽いなどと談笑した中だった。しかし、それが彼女達の私達に見せてくれた最後の笑顔になるとは夢にも思わなかった。

八月四日、いよいよ頂上に向け、佐藤、小松原、加藤、斉藤（清）、

船井、近藤の登攀隊員六名とQまで見送りに出た江川隊員はQを後にし、昼すぎにQ入りした。天気は悪化する気配、やはり午後より降雪となつた。

八月五日、朝焼けが気になるが、急ぎ六人はQへと出発した。昨日の雪でラッセルの苦労が増してはいたが、ルートをリブキン稜より直上する稜に選んだので、雪崩の危険もななく、他のパーティも全く入つておらず、この点で気分が良かった。全体としては、かなり急傾斜の岩稜だが、細かく砕けた岩は素直な傾斜を形成し、それが私達を最後まで導いてくれた。アイゼンもきまらず、歩きにくいのが安心なルートだ。安の定、午後より崩れ始めた天気はしだいに悪化し、ブリザードとなつて私達を打ちつける。六五五〇メートルのデポをつける頃、全員の消耗度濃く、さらに一〇〇メートル登つたが雪洞どころかブロックを切るにも足りない雪で、止むを得ず強風にあおられながら三人用ツェルトを二つ並べて立てた。中に入ったのは七時半、パタパタと非常にうるさく、すきまから塵のような雪が容赦なく入り込み、ビバークの如き様相のQだった。

この日、ラズジュリナヤ峰經由ルートでは、日本隊を含めて幾隊かが頂上アタックを試みたが、悪天のため引返しビバークとなつた。翌

朝、スイスの女性一人が遺体となり変わつていった。

この悪天候は三日間続き、私達はこのツェルトに釘づけした。そんなおり、八月七日の朝、「ロシヤ女性隊の一人が死亡し、現在遭難状態に陥つているため、救助を頼む」との連絡を田村隊員より受けた。すぐ後、佐藤、小松原、近藤隊員が教えられた位置へ向つたが、風雪なお一段と厳しく、ほぼ東尾根まで登つてみたが、強烈なブリザードに視界は非常に悪く、引き返すよりなかつた。後にはわかつたのだが、連絡を受けた場所は、その女性リーダーが間違つた報告をしており、実際とは大きく離れていた。ビバークの如き露営状態にある私達に捜索する余裕はなく、私達自身のことと精一杯。今にもツェルトは烈風に引きちぎられそうだが、隊員の健康状態は特別悪い者はいなかつたが、若い近藤隊員が不眠症に陥つていった。

不安な夜を迎え、風雪は依然として強く、夜中あまりにツェルトを打つ音が激しく、見るとツェルトが倒れていた。シュラフの中へ中へと逃げ込み、おさまるのを待とうとしたが、この勝負は自然の方が強い。我慢出来ず外へ出て立て直し、逃げ込むようにして戻ると中は雪で真白だ。横になつても、早く朝が来ることを考えていた。

八月八日、夜は明けしたが風は依然強く、隊員を苛立たせた。習慣でホエーブスに火をつけ、朝食のスープを作っている間も皆の動作はのろく、これからアタックに出るといふ雰囲気はなかつた。しかし、スープも吸い終わり、ゆっくりではあるが習慣の身仕度をして外に出てみると、足元にレーニン氷河があった。風は強いが、視界は全く素晴らしい。隊員誰れもの頂上への意地は、「よし、アタック……」佐藤リーダーの声を聞き、火がつけられたような活力を与えた。

八時四五分、出遅れの感はまだぬがれ得ないが、ツェルトに石を乗せ、六人全員が最終キャンプを後にした。ブリザードの中、小一時間で東尾根に出た。広い雪の稜線はなだらかな起伏を持つて頂上へと続き、持つて来たザイルもコイルしたままだった。雪が乾燥しているためか、完全にはクラストしておらず、快適なアイゼン歩行は出来ない。六七〇〇メートルの稜線がこんなものとは、期待を裏切られたような気持だった。視界は完璧で、風も幾分やわらぎ始め、順調に進んでいた。途中でリブキン稜トラパスルートを上がつてきたアメリカのビーター・シェーニング等三人が休んでいるのに合流し、頂上まであと高度差四〇〇メートルと教えられる。私達の高度計は一六〇

メートル少ない高度を差していた。話もそこそこで切り上げ先を急ぐ、すでに頂上は真近に迫っていたが、五分後には嵐に激変するとも限らない、ここまで来て引き返すことを誰れもが恐れていた。

頂上への最後に残る急登の手前六九五〇メートルのゴルフ状のところにさしかかったとき、一人の人間が横たわっているのが目に入った。近づくとつれて、様子の異常さが私達の神経を緊張させた。昨日の交信の内容が隊員の脳裏を鋭く走り、「死体」と感ずるまで、ほとんど時間はいらなかった。見上げると上にも人間らしき物が倒れていた。服装などからソ連女性隊の一人であることが確認された。半身を雪に埋められ、手袋をつけていない小さな手が雪から出て変色しているのが痛々しい。そのうち、アメリカの三人も私達同様足を引きずるようになり到着し、事態はここにいる九人の誰れにも明白になってきた。

少し急にはなるが、広さの続く雪の斜面を目前の頂上に向かって登り出した。少し上つて二人目、その五メートル上に三人目と離れ離れに次々と凍死体が私達の進む前に横たわっていた。数日前、楽しく談笑し合っていた彼女達とこのように再会しようとは、悲劇としかいふ言葉がない。頂上へあと三、四〇メートルというところで、つぶれたテントの上におおいかぶさるよう倒れていた一人が七人目の遺体だった。最後の一人はこのテントの中であろうと思われた。「一名が死亡。他の七名も遭難状態……」の交信を思い起こすと、最初に死亡した一名がこのテントの中の一人であろう。

彼女達は私達が^Gで烈風にはためくツェルトのポールを押さえていたころ、行動して頂上に立ち、逃げようとしたつもりが、逃げ切れず一〇〇メートルも下らぬ間に全員疲労凍死という事態を招いたのだらう。ソ連女性登山家の中でベテランと呼ばれたいた彼女達にも非が無いといえぬまでも、自然はなんと無慈悲なのか、なにもこんな若い女性の命までも……。

残る三〇メートルの急斜面を、強くピッケルを打ち込み、呼吸を乱さぬように、あせる気持を続け、一歩ずつゆっくりとした動作を続け、二時三〇分、頂上の広い台地に出た。

高さ五メートルほどの小山がいくつもあり、その一つにレーニンの胸像と記念碑があった。どこが最高点なのかはつきりしないので、どの小山にも足跡を残しておいた。アメリカの三人も姿を現わし握手を交す。レーニン像の前で何度も何度もシャッターを押した。北バミールの山々は一望で、西方にコムニズム峰、コルヂェネフスカヤ峰がその大きな姿を連らね、南に旧モスクワ・ペキン峰が険悪な雪壁をさらけ出していた。頂上よりベースに登頂のニュースを送る。「登頂おめでとう」の声はただ嬉し。

「遺体はそのままに」との指令を受け、三時過ぎに下山開始。下では救出隊が編成されようとしていた。再び女性隊一人一人の冷たくなったその姿を見ながら急ぎ下る。高度の影響は下りといえども容赦はせず、帰りの方が長く感ぜられた。^Gまでの予定が六時に^Gに戻ると、もうすっかり元気は失せ、今夜もこの甚だ居心地の悪いツェルトで過すはめになってしまった。その上、美味しい食料どころか、本日の行動食の残りもスプーン一袋、それに若干の非常食が食料のすべてだった。頭痛と食欲不振はこの時ばかりは幸いだった。しかし、きょうのところは登頂の喜びでつまらぬことはすべて隠され、^Gにおける最も静かな夜を迎えた。

八月九日、^G、^Gには撤収するといふほどのものはなく、^Gの荷物をまとめ一気にベースまで下った。^Gの雪洞には女性隊のため、自発的にイングラント、フランスの有志が数人待機していた。彼らも一日まで行動を終了すべしというソ連側の命令の通達でその日下った。

ベースでの雑務を終え、予定通り八月一三日、再びトラックに揺られバミール高原を後にした。モスクワでは非融通性が再び私達を待っていた。

登頂には成功したものの、私達の遠征隊の組織は失敗だったといわねばなるまい。遠征隊と呼ぶにはあまりにも個人山行的であった。一五名もの個人山行が一カ月間もうまく続くはずはない。

副隊長の辞任、隊の分裂は、忙しという理由で、一度も全隊員によるトレーニング山行すら行なっていなかったという事実や、真のリーダーの不在などから十分に予想されていた。

登る気持で参加した隊員から不平、不満は出よう。然るべきことである。

しかしこのような経験が今後の海外遠征の賦金石になってくれることを願うものである。

レーニン峰登山記〈ラズジェリ ナヤルート〉

田和芳郎

ソビエト隊の行動用テントは、薄い天然繊維に銀色のコーティングをしたものであった。強度はそれほどではない。このテントが後にソ連女性隊遭難の一因となり、またラズジエリナヤの我々をも苦しめる事となる。同じ布をソ連隊は雨天用のマントに使用していた。

七月二三日、クルイレンコの大雪山崩の様子を伝えるベースキャンプへ下つた時には、霧雨が降っていた。

無線機の性能と地形の関係で、旧Qとベースキャンプとの交信は不可能だった。我々は、旧Qを出た後、Qで一度は雪崩に埋まった五人のアメリカ隊員が無事である事を知っていた。「探検家の峠」を越える時、Qからの発信をとらえていたからである。この知らせをもってベースキャンプへ下つた時、ソ連隊員の喜びよりは大変なものであった。ベースキャンプに近づくとつれ、張りめぐらされたアンテナの回りを囲んでいる大柄な彼らの姿が動くのが見えた。広大な草地であった。夕暮れのもやに溶けてしまふような、あのテントと同じ銀色のトンガリ頭のマントを

おおつていた。無線に気をとられていたのであろうか、こちらから手を振つた時ようやく私に気付いた様子であった。と同時に、数人がマントを翻して駆けだして来た。彼らの力が日本人と比較にならないほど強い事は、以前クリミヤのロッククライミングコンペの時に知っていたが、力いっぱい抱きしめて顔中にキスをし、我々とアメリカ隊の無事を喜んでくれた。

翌二四日、Qに残留していた隊員がベースキャンプへ帰つて来た。二八日まで悪天で、ベースキャンプでも数十センチの積雪をみる。この間、危険につき行動は中止するよう、ソ連側より各部隊に通告があり、加えてクルイレンコルートは今後禁止するとの事であった。こうして前半は終わったが、悪天でベースキャンプに滞在中、天候が回復すれば、リブキンルートとラズジェリナヤルートの二つから頂上を目指す事と決定された。

前提はクルイレンコの大雪山崩で装備、食料に不足が出ている事。一つはルートに全隊員を投入する事に對

する疑問。日程的にも余裕がなく、ローテーションも困難である事。絶対雪崩がないという事であったクルイレンコで雪崩の被害がた後でもあり、またソ連側の推薦するリブキンルートをとる事への疑問。ラズジエリナヤは事前の情報も多かつたのに比して、リブキンの情報、特に危険度については未知である事。この点についてはソ連側の本には落石ありと記載されていたが、ヘルメットもなく三つ道具も不足しているように見えたからである。

こうして七月二九日、二つのパーティを編成して、行動を再開した。ラズジェリナヤのメンバーは、斉藤(一)、角張、田和、黒須の四名である。七月二九日は、ベースキャンプより新Qへ荷上げ後、旧Qとの分岐地点にあつたデポテントへ下り、さらに新Qへ荷上げる。翌三〇日、斉藤(一)、田和、黒須の三名で、Qの少し手前までテント、食料などを荷上げる。テントはソ連側の例のものを二張借用した。この日は朝は快晴であつたが、午後になつて定期便のアラレと雷に見舞われた。ノドの渇きが激しい。Qへ泊まる。

七月三十一日、四名揃つてQへ、ルートに特に問題なく、ソ連隊のQとなつてリブキンルートの下部をかすめて五二〇〇メートル付近まで登り、五三〇〇メートルQ地点へは

北壁下部をトラバースする。傾斜はそれほどではなく、ところどころに小さなクレバスがある程度、ただしデブリは二、三カ所みられる。Qはラズジェリナヤ峰へ続く尾根より派生した岩尾根のとりつき点にあり、後に、ラズジェリナヤ方向よりの雪崩の爆風を浴びるが、広々としており、直接雪崩の危険はまずない。各国の大小のテントが並び、ちょっとした団地の観がある。アメリカ、西独の女性は、ビキニ姿で日光浴などしており、とても五三〇〇メートルのQとは思えない雰囲気である。後に帰らぬ人となつたスイス女性隊員の誕生日とかで、信号弾を打ち上げて祝つたりした。水は岩を伝わる小さな流れをアイスハーケンで誘導してくる。

八月一日、五二〇〇メートル地点に残したテント、食料などのデポ品を回収。午後は休養。八月二日、Q建設に向かう。Qはラズジェリナヤを越えてすぐの地点、レーニンの巨コルになつた六〇五〇メートルの巨大な雪庇の陰である。途中、角張不調のため、斉藤(一)が付添つて二名Qへ下る。残る装備を田和、黒須の両名でQへ運ぶ。ラズジェリナヤ峰(六一四八メートル)の登りはかなり急である。いわゆる胸突八丁の感であるが、岩はなく全くの雪である。スイス女性隊と抜きつ抜かれつ

大切な装備はみなさつきデポした事を忘れていたのである。ここで頭がボケているのに気づいた。視界はほとんど低下して、トレースも消えはじめていた。これ以上は危険と判断し、午後一時四五分、引き返す事とする。かすかなトレースを辿ってデポ地まで引き返す間、気が気ではなかった。こんなノツペリした所の方角を失なったら最後である。デポ地でビバークするとの意見もあったが、少しでも下る事にしてアンザイレンする。

ここからは急に眠気が出て、ザイルに引きずられるような格好で下って行く。ときおりアンザイレンを解いているのに気づいては、あわててつけないおしたりした。たぶんQのすぐ上の急斜面を登りきったあたりと思われるが、スイス、西独の女性隊員三名が岩陰にいた所である。斎藤、黒須が確認した所によると、今夜はそこでビバークするから大丈夫

との事であった。そこより別パーティのスイス隊員一名が加わって下り始めた。やや左によつた感したがそのまま下る。視界悪く、雪と空の判別が出来ない。ルートはずれた事に気づき登りなおす。途中よりトラバースしながら正当ルートを求めるが、雪が深いためラッセルが遅れる。スイス隊員が業を乞はしたのであるるか、アンザイレンを解いて一人で動き始めた。その途端、岩にかけた手はずれて、ストック、アイゼンをとばされながら滑落しはじめた。運よく少し下の岩にひつかかって停止したので、もと通り四人でアンザイレンをする事となる。日は暮れている。風強く吹雪。ときおり雷で青白く雪面が光る。雪はところによつて胸にまで達し、雪崩の危険もあるため極力岩のルートを取るようになる。Qのすぐ近くにいる事は解かっているのだが、疲労も激しく午後九時、ビバーク決定。平衡感覚が

狂っているのか、平地と思つた所が急斜面であつたりして適当な場所がない。ようやく小さな岩陰を利用してビバークサイトを作る。黒須スリッパ。ザイルで止まる。その夜はツェルトの端を押さえながらビバークする。ノドが渇くが、ロウソクもバーナーも風ですぐ消えてしまふ。それでも何かしていた方が気が紛れるので何度でも火をつける。

八月六日、夜明けとともに行動開始。一時間足らずでQへ帰着する。我々の着いた約二時間後、西独の女性一人でQ着。一人死亡を告げる。昨夜の様子を泣きながら話す。救助隊が編成され残る一名収容。手足、顔面に凍傷あり。Q全体のガソリン、食料は不足気味となる。他のルートでも事故があつたとの交信を傍受する。QよりQに向けて救援隊が出ているとの事。ソビエト、アメリカ、それにフランスとオーストリアのガイドによる編成。出発の決定が遅れ

Q撤収にも手間取る。視界悪い。午後四時、Q発。ラズジェリナヤ峰を越える。身体が浮きそりな烈風で、ときどき吹き倒される。ラズジェリナヤ頂上からルートがうまく取れなくなる。各国隊員計三〇名が一行につながつて下る。八甲田山の事が頭に浮かぶ。救援隊に届く事を願ひながら、みな一斉に大声でコールする数度目にずつと右方よりかすかな返答があつた。みな顔がホツとするのがわかる。Qでは紅茶を作つて待たせてくれた。我々のテントは、端が破れて来て使いにくくなつていた。翌朝起きてみるとテントの中は雪でまっ白であつた。

八月八日、Q撤収。途中、ソ連女性隊の全滅した事を交信にて知る。Q近くリブキンルートの取り付きには、ソ連隊が集結していた。ここでリブキン日本隊の登頂を交信にて知つた。

そのしなやかな身の動きは、体操の選手を思い起こさせた。特に金髪の下に沈んだ淡青色の瞳は、いつも何か遠いところを見つめているよう的印象的だつた。その時の集会で彼女は、バミールのコルジェネフスカヤ峰(七一〇五メートル)に女性単独チームを引き連れて登頂したことに對し、表彰されていた。

◆ソ連選抜女性隊の遭難

田村俊介

今回の国際バミール・キャンプにソ連アルピニズム連盟隊として、ソ連選抜女性隊が参加することを、モ

スクワに在る時より聞いていた。その隊長にはエリヴィラ・シャタエワさんが指名されていた。彼女

には昨年(一九七四年)の春にモスクワ体育大学で行なわれたアルピニスト集会で、その時一緒に来ていた御主人のワロージャ・シャターエワに紹介された。ワロージャ・シャターエワはアルピニズム連盟の事務局に勤務しており、かねてより昵懇の仲であつた。当時三五才(一九三八年生れ)のエリヴィラは小柄だが、

モスクワにわれわれの隊が集結した時、ソ連側からは女性隊が外国隊と一緒に登り、その女性隊の隊長にシャターエフがなることをみんなに話すと、一九七一年にクリミヤ岩登り大会に参加した角張隊員、一九七三年に同じく同大会に参加した藤井田和、近藤の各隊員もその時合つて顔見知りだということだった。御主人のシャターエフも、昨年の夏の前半は南西バミールに入るが、それを終えてから国際バミール・キャンプに立ち寄ると話していた。

七月二十七日、そのシャターエフにベースキャンプでひよつこと出会った。その時、われわれは悪天候のため、全員ベースキャンプにまで下り停滞していた。シャターエフはもうすでに真黒に雪焼けていた。彼は南西バミールのエンゲルス峰（六一〇メートル）に登り、昨夜遅く友人と二人でバミール公道をぶつとばし、ベースキャンプに着いたばかりだということだった。日本隊がクルイレンコ峠の途中の斜面にテントや食料をデポしていたのが先日の雪崩で流されたので、今度はルートを変更し、リブキン岩のルートから登る予定であることを彼に話したところ、彼自身も友人と二人でそのルートを登る予定だし、細君の女性チームも、そのルートからもうすでにデポを終わりに、今このベースキ

ャンプに下りて来ているという。それならばと、彼女らにルート説明をして貰うことにした。

翌日、シャターエフはエリウイラとその友人のイリシャル・ムハメツドワさん（一九四一年生れ）を連れて、私達のテントを訪れてくれた。ムハメツドワさんはタジク共和国から選抜された女流登山家で、エリウイラよりやや上背があり、非常に精悍な感じのする女性だった。われわれ全員はテントの横の草原にマットを敷いて車座になり、彼女達の説明を聞いた。女性隊はすでにリブキン岩より上の五二〇〇メートル地点に三室もある雪洞を掘っており、そこに食料などをデポしていた。エリウイラは紙にマジック・ペンで詳細にルート図を書いて説明してくれた。翌二十九日、ソ連女性隊八名とシャターエフの二人パーティーはベースキャンプを出発した。

七月三十一日に入りました私は、翌八月一日に河北隊員とソ連女性隊の雪洞のあるGまで登った。雪洞は五二〇〇メートル地点のゴルになった雪原の左よりに斜面を利用して掘っており、われわれ二人は日中の猛烈な日射しを避けて、この雪洞の中にもぐり込んだ。エリウイラの話のとおり、雪洞は三室からなり、どの部屋もロシア的スケールで非常に大きかった。われわれは女性の細腕でよ

くこれだけ大きなものを掘ったものだと感じた。前室の側壁には棚が作られており、そこにはきちんと整頓して鍋や食べ残しの食料が置いてあった。女性隊はGに向っている様子だった。

その日、われわれが雪洞から、リブキン岩ルートの取付き点の四二〇〇メートルまで下つて来ると、ソ連トレーナー隊（外国隊へのアドバイザー隊）の四名クレッツコ、チェルバノフ、ギベンレイテル、それに日本隊のトレーナーであるポリシヨーンノクがソ連隊のGでとぐるを巻いていた。彼らは日暮れまでGまで登ることである。クレッツコはその時ちょうどソ連女性隊から各外国隊の現在位置の連絡を受けていた。彼らの話によると、シャターエフの二名パーティーは登頂を果し、昨夜遅くGまでふらふらになって下降して来たが、今日はもうベースキャンプに下ってしまったらしい。とすると、ベースキャンプから荷物を全部背負って、たつた四日間て頂上を往復するという超人的な登山を行つたわけだ。

ラズジェリナヤ峰經由で頂上に向っているわれわれの別動隊はGにいたが、リブキン・ルートから頂上に向う隊にデポと高度順化を終えGにまで下りて来ていた。そして八月四日、アタックに出る六隊員をGから

送り出した。

八月五日、リブキン隊はGから東稜直下の六六〇〇メートルのGに入った。ラズジェリナヤ隊は外国隊数隊と共にGから頂上に向っていた。しかし、西方から押し寄せる黒雲と次第に度を増す強風に天候悪化を予測し、頂上の手前、六九〇〇メートルあたりで退却した。彼らは途中ルートからはずれ、Gまであと二〇〇メートルほどを残した地点でビヴァクに入った。同じルートを退却中のスイス女性隊三名よりなる国際女性隊は、彼らよりさらに上部でビヴァクに入っていた。

一方、東稜上の六四〇〇メートルあたりより出発したと思われるソ連女性隊は、この日夕刻、頂上に達した模様であった。

八月六日、私と藤井隊員はソ連本部との連絡のためにGからベースキャンプに下った。Gでも昨夜の降雪で相当雪が積り、下降路のレーニン氷河は三〇センチ以上の新雪で覆われていた。夕方、ベースキャンプの広場に大勢の人が集まつて来て、スイス国旗が半旗にされた。ラズジェリナヤ峰とレーニン峰を結ぶ稜線上で、昨夜ビヴァクしていた国際女性隊のスイス隊員が疲労凍死したのだ。この日昼過ぎから翌朝までベースキャンプでもかなりの降雪があった。一八時三〇分の交信で、日本

ラズジェリナヤ隊はビヴァク地点より無事Qまで下降し、リップキン隊は今日は停滞しQで元気にツエルトにぐるまっていることを確認した。この時点でソ連女性隊は一名が極度に疲労しており、また強風で視界が利かないため東稜上でビヴァク中との連絡があった。

八月七日、朝テントから出ると、ソ連の国旗がバミールキャンプの事務局長モナステイリスキイによつて半旗にされていた。昨日疲労困憊していた女性隊員一名が力及ばず亡くなったという。そしてソ連女性隊全員が東稜上で動けずにいる。バミール・キャンプの本部長のアバラコフが私のところにやつて来て、「ソ連女性隊は今東稜上の六七〇〇メートル地点あたりで動けずにいる、日本隊がいるところより一〇〇メートルほど登り、稜線に出て、そこでトレースを探し大声で叫び、彼らの現在位置を確認して欲しい、また彼らが近くで見つかれば下降に協力してやって欲しい」と依頼して来た。この時はまだアバラコフも、これが決定的な悲劇にまで発展するとは予測していなかったようである。私も勿論、あのベテランのシャターエフやムハメッドワが遭難するなどは考えてもいなかった。隊員が一人死亡したのも、高度障害で極度に疲労しこの不幸に見舞われたのだらうと思つてい

た。そして他の隊員は全員元気なものと思つていた。

しかし、とにかく一二時三〇分の定期交信で、日本隊に稜線まで出てソ連女性隊の状態を説明し、彼女達を探すよう依頼した。Qもかなり風は強く吹き荒れている様子だったが、佐藤、小松原、近藤の三隊員はすぐ出発してくれた。それから約二時間後の交信で、稜線とおぼしき所に出たが、悪天候で視界は利かない、風も相当強い、トレースは全くない、たとえあつてもすぐ風で吹き消されたらう、叫んでみたが全く何の応答もない、との彼らからの連絡を受けた。さらに前進することは二重遭難を起こす危険があるので、三人はここで搜索を打ち切り、Qへの下降に入った。

ソ連本部と女性隊は一時間おきに交信していたが、やがてテントが風で破られ、事態は急速に悪化した。ガソリンも底をついたことがわかった。間もなくさらに二人の隊員が死亡したことが確認され完全に遭難状態になった。この時になつてやつと女性隊は日本隊とはかなり距離がある、頂上直下の六九〇〇メートルあたりの急斜面にいたことが確認された。アバラコフは、「今日はおもう救援隊はそこまで行けない、とにかく自力で遭難状態より脱出する他はない、稜線づたいに下降し、六七〇〇

メートルの稜線直下にいる日本隊のテントに入り込むか、それが駄目なら雪洞を掘れ、小さな穴でもよい、風が直接当たらない穴を掘れ」と指示した。女性隊は、「下降は視界が利かなくても無理だ、とにかく雪洞を掘るより努力する」と応答してきた。二〇時の交信で、「テントは完全に破られ、全員が強風の吹きすさぶ稜線上に放り出された」と伝えて来た。「手足は完全に凍傷にやられ感覚なく、雪洞を掘るところではない」と、それらの回らぬ声が強風の咆哮に入りまじり聞えてくる。「エリウイラ、とにかく雪洞を掘るんだ、頑張れ、明日まで持ち堪えるんだ、明日になれば日本隊がそこへ行ってくれる」とゆつくりした、しかし厳しい声でアバラコフは指示を与えた。「マイタリ・ミ

ハイロウツチ、なんとかやつてみま

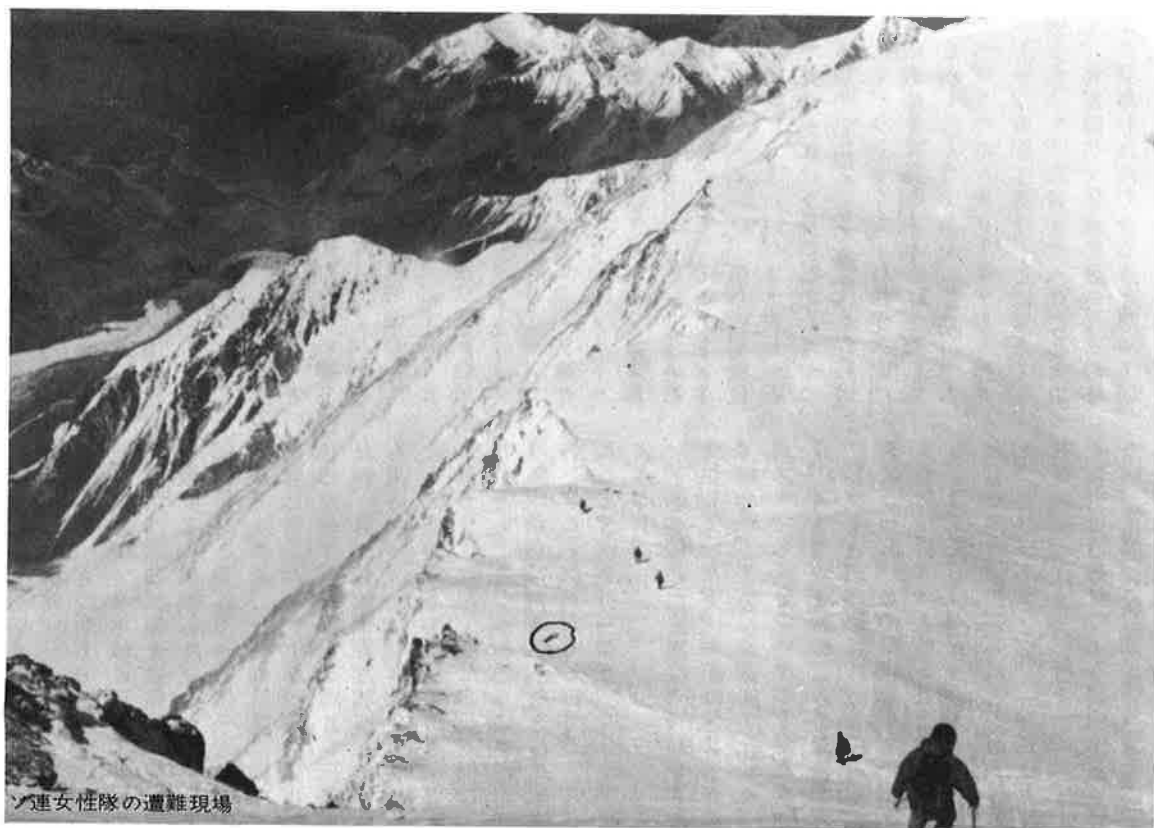
す」という感覚を失つたようなエリウイラの声はもう数時間後に迫つた彼女の運命を暗示していた。二一時一五分の交信でも、アバラコフは何人生き残っているかわからない隊員達を励ました。女性隊からの応答はとぎれとぎれの弱々しい声で、ほとんど聞きとれない。「もつと強く発信ノブを押して話せ」と怒鳴るが、最初のひとことふたことだけ聞かえ、すぐ聞かえなくなってしまう。もうノブを押す力も残っていないのだ。だが最後に、それらの回らぬ間のび

のしたロシア語ではあるが、いやに明確にエリウイラの声が聞こえた。

「マイタリ・ミハイロウツチ……：ウミラーエム（私たちに死が迫っています）……最後の力をふり絞り、送信したのだらう。トランシーバーを囲んだ人の群の中から嗚咽が聞こえた。これが女性隊の最後の言葉になった。その後も三〇分ほど、通信係が呼びかけ続けたが、もはや応答はなかった。

この時、日本隊以外のリップキン・ルート上にいる各外国隊の位置は次のおりであった。ソ連チェリキンスク隊およびノポリリスク・ポーランド合同隊は、リップキン岩トラパス・ルート上の六二〇〇メートル地点にいたが、燃料も使い尽し、ソ連女性隊の救出に出るところか、下降の機会をうかがつていた。ソ連トレーナー隊三名（ギベンレイテルは連絡のためベースキャンプに下つて来た）は悪天候のため、QよりQまで下つていた。アメリカ隊三名は日本隊のごく近くにいる筈だったが、音信不通で安否が気づかわれていた。アメリカ、フランス、イギリス、スコットランドよりなる合同救助隊は、今日ベースキャンプよりQに入りソ連トレーナー隊に合流したばかりだった。

夜になると気温はベースキャンプでもマイナス七度まで下つた。「稜



ソ連女性隊の遭難現場

線ではマイナス二五度位まで下り、おそらく全員朝まで持ち堪えられな「いだろう」とアバラーコフがぼつりといった。

翌八月八日は快晴だった。一片の雲もなく、レーニン峰とその左右の稜線には、風になびくたてがみのような雪煙が舞い上っている。紺碧の蒼空に噴き上る雪煙が、昨日の悲劇を鮮烈に思い起こさせた。寒暖計はマイナス五度を指していた。六時半の交信で、リブキン隊の頂上に向いますという元気な声が聞こえたが、こちらからの声は聞こえないようである。多分、明け方の気温下降でトランシーバーに異常が起きたのだろう。一二時半の交信で、六八五〇メートルの地点でシャターエワと思われる遺体を発見した、その上部にも死体が点々と横たわっている様子である、との連絡を受けた。そしてアメリカ隊三名も日本隊に合流し、一緒に頂上に向っていることがわかった。一五時の交信で日本隊六名、アメリカ隊三名がレーニン峰の頂上に立ったと連絡があった。彼らは六九五〇メートルまでにさらに六名の遺体を発見していた。

八月九日に合同葬が行なわれた。今回の国際・ピール・キャンプの犠牲者は、七月二四日地震により誘発された雪崩に埋ったアメリカ隊員一名、スイス女性隊員一名、ソ連女性

隊全員八名で、合計一〇名にも達した。この合同葬には急拠モスクワから引き返して来たシャターエフ、体育スポーツ委員会コーワリ次官、アメリカから来られたアメリカ隊員の両親、ドゥシャンベから来られたムハメドワさんの母堂も出席された。墓標のケルンはベースキャンプより約一〇〇メートルほど離れた、草原の中にぼつんと置き残されたような巨石の上に積まれた。周囲には白灰色のエーデルワイスや黄色のキンポウゲが咲き乱れていた。レーニン峰が目前に傲然と聳えていた。巨岩にはアメリカ隊員の碑だけが間に合っただけで、関係者三、四人が悼辞を述べたが、中でもアバラーコフの言葉が印象的だった。「……ソ連女性隊は、優秀な隊員達で構成されていた。彼女達は女性単独パーティーでウシバの縦走を成し遂げ、コルジェネフスカヤ峰にも登った。しかしまだ彼女達の力より自然の力の方が強かった……」

八月一〇日午後、リブキン隊とラズジェリナヤ隊がベースキャンプに下って来た。船井隊員は、あらかじめ私が依頼していたとおり、頂上のケルンのそばの空罐から前回の登頂者のメモをとり出し、その代りに日本隊の登頂者のメモを入れてきた。これがソ連のしきたりになっていた。船井隊員の持ち帰ったメモには鉛筆

の走り書きで、シャターエフ、ムハメッドワさん達八名の名前と、八月五日登頂天候悪し、と書かれていた。八月五日は前述したとおり、ラズジエリナヤ峰經由頂上に向った各隊は、三時頃にはもう天候悪化のため全隊引き返しているが、ソ連女性隊だけが頂上に達している。ラズジエ

ベース・キャンプでのソ連側とのミーティング記録

リナヤの各隊は西方からの天候悪化が良くわかったのに対し、東稜を登っていたソ連女性隊はピークにさえぎられ、天候悪化の予測ができにくかったのではないかと思われる。それで、女性隊は頂上を強行アタックし、下降後すぐに悪天候につかまり、六九〇〇メートル地点でビヴァクセ

ざるを得なくなつたと考えられる。夕刻、アバラコフとシャターエフに登頂隊員が遭難現場の状況説明をし、又アバラコフの要請でソ連女性隊員達の死亡確認書を作成した。八月一三日早朝、われわれがピミール・キャンプを去る時、ソ連アルピニズム連盟のアヌフニコフがわ

れわれのトラックの上にあがつて来て、シャターエフの隊は今日は遭難現場の六九五〇メートルに達する筈だ、日本隊にはいろいろ協力して貰い、ありがとう、といってわれわれの手を強く握った。

布施栄明

ベースキャンプにおいて、ソ連側

から各国隊への連絡は、各隊の代表者とキャンプの最高責任者であるアバラコフ氏、ソ連人の英語、ドイツ語の通訳者の間で行なわれた。アバラコフ氏がロシア語で話し、英語、独語に通訳されていた。

ソ連側との交渉に当って、我々の隊にはロシア語に堪能な田村俊介氏がおられた事は、隊の運営上、極めて有利であり、深く感謝の意を表する次第である。

登山活動全般にわたつてソ連側からの連絡があった。

各国隊とも、どここのルート、ピークをえらんでもよい。各国隊にソ連側からアドバイザーをつけるので、登山活動について十分検討してほしい。日本隊にはアレック・ポリシヨ

ーノック氏がつき、よく面倒をみてくれた。

パミール地方の天気予報はないが、北パミールでは好天がつづいている。行動計画については、その都度、

チーフ名、メンバー名、ルート、出発、帰着時間について報告する。また一名は必ずベースキャンプに残留すること。

トランシーバーは、パミールが国境地帯であるので、ソ連側から貸与するもの以外は使用を禁止する。

高度順化については十分留意してほしい。ベースには常時、ドクターがおり診療に当たっている。

荷上げする食糧、ガソリンは、表を提出の上、受領する。行動食は一

定していない。ベースでの食事は、セルフサービスで食堂テントで行なう。

レーニン氷河の四二〇〇メートルの地点にソ連側テントが常設され、救助用タンカ、酸素などが配備されている。

開会式がベースキャンプで行なわれた。国旗掲揚、ソ連側、キルギスの現地代表などのあいさつ、各国隊からのプレゼント贈呈などがあり、民族衣裳をまとつたキルギス女性からお菓子の接待があった。

開会式後、各国隊代表は、キルギス人が放牧するために住んでいるユルタ（バオ）に招待され、馬乳、羊肉、コニヤックなどの接待をうけた。

七月二三日より天候がぐずれ、地震も発生した。この頃、第一九回共産党大会峰に登っていたアメリカ隊、フランス隊が帰らず、アメリカ隊は

雪崩のため一名が死亡した。

この日のミーティングでは、ソ連側から各国隊へ救援隊出動の要請があつた。日本隊からは、江川、佐藤両隊員が待機していたが、実際には出動しなかつた。

しばらく悪天候がつづくので、ソ連側から許可のあるまで行動が禁止された。

天候も回復し、登山行動禁止はとけた。ソ連側から今後の行動は慎重に行なつてほしい。またリブキン稜などのリッチ・ルートをとつてほしい。小パーティーは他と共同してパーティーの編成をしてほしいなどの要請があつた。

Gを撤収して、全員がベースキャンプへ下つた日、閉会式が行なわれたが、時間的にわれわれは出席することが出来なかつた。

登頂 雑感

佐藤 登

八月二三日のクルイレンコ峠からの雪崩により装備、食料を流失しこのルートを放棄したが、まずこのルートを目見たとき予想外に急な雪壁だという事を感じた。ソ連側の説明によれば、雪の状態は安定しており雪崩の心配はないとのことであった。しかし雪壁の中央部には雪崩の跡があり、下部のプラトリーにはデブリが出ていた。荷上げを行い(五〇〇メートル)の設営場所を決定するにあたり、雪崩に対する不安から五三〇〇メートルに Q_2 を置くかどうか議論したことを覚えている。結果的にはどちらに決定してもこの雪崩は避ける事はできなかったのだが。また雪崩の前夜 Q_2 で過したが、常に雪崩に対する不安があり、二度と Q_2 には泊りたくなかった。

次の日、クルイレンコ峠に向った。五三〇〇メートル付近のアメリカ隊キャンプを通りすぎるとき、上部はクラストした上に新雪が積り、雪崩

の危険が大きいから登らない方が良いと忠告された。 Q_2 に下ろうと四六〇〇メートルのプラトリーに到着。 Q_2 入りするため登ってきた四人と話し合っているとき、雪崩に襲われた。地震による雪崩とはいえアメリカ隊の判断の確かさに感心している。この雪壁を危険と感じたのは我が隊も同様であった。

ただ危険と感ずるだけでなく、ルートの変更、あるいは行動に対してなんらかの対策を立て行動に移すべきだったと反省している。各隊員とも高度順応にやつきになっており、また他のパーティも登っているという事実からルート変更などは考えもしなかった。クルイレンコ峠ルートは、たしかに雪の状態の良い時をねらって登れば、雪崩をさけ安全に登れるルートであろう。しかし極地法を用い、長期にわたりかつ多人数が往復するには危険なルートである。これらの点を十分検討すべきであった。

クルイレンコ峠ルートを放棄し次のルートを選ぶにあたり、登山期間が一五日しかない事、装備の流失により雪洞、ツェルト利用による頂上アタック、高度順応は五三〇〇メートルまでしか終わっていないなどの問題があった。ソ連側アドバイザーであるアレックは、リブキン稜直上ルートを推薦した。その理由は山頂

まで最短ルートであり、ラズジエリナヤ・ルートやリブキントラバースルートに比しキャンプが一つ少なくて済む事、また特に困難な場所もないとのことであった。

このルートを登ったのは日本隊ただ一隊であり、リブキン稜にルートを取った各国隊はトラバースルートを登っていた。またルートの容易さから考えるとラズジエリナヤ・ルートからリブキン稜トラバースルートと一般的には考えられる。なぜ直上ルートを推薦したか考えてみるに、アレック自身が、一九六九年夏、ドイツのトニー・ヒーベラー隊の遭難救助のため短期間で登った経験があったためと思っている。

時間的に余裕もなくまた他のルートに決める特別な要素もなかったため「当って砕ける」的な気持でリブキン直上ルートに決定した。

ラズジエリナヤ・ルートを選んだ隊員は、松本氏の体験談から確実に頂上に立てると考えて選んだと思う。

私もラズジエリナヤ・ルートを選擇うか迷ったりした。ただ登るならば日本人として別のルートから登りたかった。

登山活動を再開したのは七月三日である。登山期間は八月一〇日までと決められ、オーソドックスな高度順応を行ない、アタックするには時間的余裕がなく、また装備不足に



より雪洞、ツェルト使用という七〇〇メートルの登山では考えられない軽装備。その上レーニン峰に身の危険を冒してまでアタックする魅力を感じなかった事から、登頂の可能性は薄いと思っていた。しかし皮肉にも軽装備のゆえ、荷上げ量が少なく一日でかなりの高度を稼ぐことができ、また各隊員とも高度に対し心配していた以上に強かった。

q (四一〇〇メートル) から見上げると、リブキン稜は頂上の左の主稜線につきあげ、なかなかの好ルートに見えた。直上ルートはq (五三〇〇メートル) の上部でトラバースルートと分かれ直上する。急斜面と高度のわりにはラツセルもあり苦しい。上部は岩稜となるが雪が付いている所を選んで登った。 TENT を張るに十分な場所はなかったが、ツェルトならどこでも張ることができた。ツェルト二張りのq (六八〇〇メートル) は風当たりが強く、炊事用の雪を集めるのに苦労した。

このルートは我が隊だけで、自分の目と意志でルートが選べる点で楽しみがあり、また安心感があった。特に今までソ連側との交渉や、あるいは各国隊の行動に目を奪われ、ベイスを乱された我々はやっと本来の登山ができると感じた。ただ日数の面でのあせりや、未知な七〇〇メートルの高度に対する不安のためア

タック方法をいかにするか、なかなか結論は出なかった。

八月五日にq入りし、吹雪のため二日間閉じ込められた。八月六日は朝から強風ではあったが晴れていた。頂上アタックは可能な天候であったが、前日の過労と高度の影響のためツェルトを出る気にならなかった。

私の判断では七日は回復すると思っていたが、七日も吹雪であり前日のアタックを逸したことを悔んだ。食料はあと二日分しかなく、また隊員の疲労度から考えて、もし明日(八日)晴れなければ登頂は不可能と考えた。朝の交信でソ連女性隊遭難の連絡により、ほぼ主稜線まで登ったが吹雪のため引き返した。午後の交信でアレックから、明日は天候が回復する見込みなので下山するよう指示があったが、明日の行動については我々の判断で行なりことを伝えた。我々にもしもの事があれば、日本隊の担当であるアレックの責任となるためアレックの気持を解さぬではなかったが、ここまで来て引きさがる気はなかった。

八日朝も風強く半分あきらめていたが、外に出た近藤隊員より天候の回復を知らされ、あわてて出発の準備をした。出遅れたが全員山頂に向って出発した。頂上直下ソ連女性隊の遺体に遭遇したがとてもかく頂上に立つ事とした。二時半、レーニン峰

山頂に立った。山頂に立ってもなんの感動もなかった。山頂に立った時から、次はいかに無事に下山するかにか心になかった。

幸運にも登頂出来たが、時間的にもまた天候の面でもまったくラッキイーな登頂であり、登山方法その他反省すべき点が多い。

まずレーニン峰をアタックするのに極地法を用いる必要があったかどうか。今回の登山では、ソ連はもちろん各国隊ともアルプスの延長的な登山をやっていた。それがため遭難

事故が多かったともいえる。シェルパレス登山であるため全隊員が荷上げを行う必要があり、限られた期間内で高度順応を行ない登頂するためには極地法は効率的でなかった。極地法のため荷上げ量が多くなり、ラツシユタクテックスでレーニン峰に向った各国隊に比し登山スピードの面で差が出た。そのため隊員内にあせりが生じ荷上げ計画や登頂計画、またルートに対する批判が出たのは当然と考えている。我が隊も最終的にはラツシユによる頂上アタックとなったが、今後海外登山でも七〇〇〇メートル級の山はラツシユ的な登山形態をますますとるであろう。

次にリブキン稜ルート、ラズジェリチャ・ルートの選択は間違っていたかどうかどうか。どちらのルートも短期間にいかに確実に頂上に立つかということを一に考え、アレックの推薦や、松本氏の話に頼りに決定したもので、ルートに対する魅力で選んだものでなかった。幸いにもリブキン直上ルートは好ルートであったが、qからながめた北稜ルートの雪稜の美しさが印象に残っている。レーニン峰は数多くの人に登られ、我が隊もどうしても登頂しなければならぬという重圧下にあったが、たとえ頂上に立てなくともやはり満足するようなルート選択のプロセスが本筋だろう。

●第3章

各係報告

1 ● 保険について

田和芳郎

最近、海外遠征隊数の急激な増加に伴ない、海外における登山活動中の事故を対象とした保険ニードも高まってきた。しかしながら、他のニードに比較すれば日も浅く、占率も極めて低いために、条件や料率などについての整備はされていない。今回についていえば、割増保険料を支払いで、損保契約締結の段階になって、当初の十数倍の料率に訂正され、結局この方式は諦める事となった。一般的にいって生保、損保を通じて登山はいわゆる「危険競技種目」の中に数えられている。従って、どこからどこまでを「旅行」とし、どこからを「登山」とするかで大きな差が生ずる。また事故と病気についても登山活動中であつてみれば、明

確な線は引き難いケースも考えられる。この事は、損保海外旅行保険割増支払方式の場合、特に問題となろう。

この方式は、海外旅行中の事故に対し、死亡保険金、後遺障害保険金、治療実費が支払われるという保険に登山中の危険率を考慮して割増金を支払う方式である。従って適用範囲は、登山中の急激かつ偶然な外来の事故であり、日射病、心神喪失などの高山で起き得る可能性のあるものや、本人の重大な過失によるものは免責事項に含まれる。また高山病は事故扱とはされないが、凍傷については、遭難とみなせる場合のみ関係機関の証明により事故扱いにするの事であった。こうした点をカバーするために疾病入院および疾病死亡などの特約を付する事も可能であったが、かなり高額になる事は避けられない。

次に生保海外旅行保険であるが、

危険競技に参加中の事故については免責とされている。また登山、探検、観測などを目的とした海外渡航予定者については、生命保険新規加入取扱対象外とされている。ただし団体扱いはこの限りではなく、例外的な扱いをする会社も見られる。長期間の海外渡航予定者の場合、保険料集金手配の困難さと、さらに登山や探検を目的とした場合は、危険度の大幅な増大などが新規契約を取り扱わない理由として考えられる。前者については、所属団体を通じての支払いや銀行口座よりの自動振替で解決されると思われる。また後者については、保険金額を低く限定する事により事故発生率の割合に比して、保険金の全体に占める割合は小さくなる。

今回の場合、個人でこれまで加入していた分は別にして、主契約養老部分が五〇万円に限定された、団体山岳保険に加入することとなった。

この保険は団体扱いで、銀行口座自動振替とし、五〇万円の災害特約を付加する事により、死亡は一〇〇万円という事になる。料率は特に割高という事はない。内容的には、行方不明の事態が生じた時に死亡と認定して保険金が支払われるため、捜索費用として使用可能である事と、登山、探検などを目前に控えた海外渡航予定者でも、新規加入が出来るという点の特徴である。

2 ● パミールの気象

角張嘉孝

ヒマラヤの気象については、単に登山に役立てるといった直接的な動機からばかりでなく、その日本への影響を考へることや水資源の立場などさまざまなであり、近頃はもつとグローバルな地球の気象の変動を探るため、氷河の観測を通じて、接近し

医療について

3 ●

小松原秀一

このたびの遠征登山はかなり特徴的であつた。すなわち「一定程度、開発のあつた山を舞台に」「ソ連アルピニズム連盟の主催」で行なわれた登山であることが、その特徴に起因しているだろう。医療係の立場からみれば、以下の如き状況であつた。

ベースキャンプから病院施設（オーシ）までヘリコプターで数時間だつた。私の知る限りでは肺炎のため三人、犬に噛まれた一人がヘリコプターで運ばれている。ソ連の医療班がベースキャンプ、レーニン氷河のG（当初クルイレンコ峠にも設けられる予定であつたらしい）に設けられた。「スポーツ大会」の主催者としての配慮がうかがえる。また登山開始前にソ連人医師による健康診断（血圧、脈拍数測定、胸部聴診）があり、「君は高度順化を急ぐべきではない」といったようなアドバイスがなされた。ただし今回に限って言えば忠告であつて命令ではなかつた。

ベースキャンプではロシヤ料理が出され、全員高カロリー、高蛋白質の摂取が可能であつた。上部キャンプ

では支給された行動食に不慣れなため、個人差はあろうが、質量共に十分の傾向はまぬがれなかつた。

モスクワからベースキャンプ（三七〇〇メートル）まで二〇時間程度を要すだけであつた。また三七〇〇メートルから七一三四メートルまでの往復が二五日間の期限つき（モンズーンより絶対的なタイムリミット）であつた。技術的にはさしたる問題となる難場がなかつたので、外国隊の七〇〇〇メートル経験者にとつては数日間で往復可能である（事実そうであつた）が、五〇〇〇メートル経験者がひとりだけという我々の隊では、結果的には必要最小限の期間（ベースキャンプで足止めを食つた数日間があつたが）であつたといえる。これらの特徴については、入山前にある程度まで予想できた。そこで医療計画は下記の如くとなつた。すなわち、手術用具、輸血セット、人工呼吸器、現地人・ポーター（使用を許されない）用の過剰な薬剤、以上を不必要と考へ持参しなかつた。ただし医療サービスの詳細が不明であつたため、医療用酸素ボンベ二本と流量計、酸素マスクを用意した。携行した医薬品は別表として後に記す。

次に若干の例を紹介し、入山中の

隊員の身体的状況の概略の報告としたい。

A 隊員はベースキャンプに入つた日から上腹部痛を訴え、行動に伴つて発症し、登山期間を通して継続した。Gでは、強い食欲不振と悪心を伴い、登頂後にはいわゆるコーヒ残渣様の吐物があり、典型的な胃潰瘍症状を呈した。帰国後レントゲン検査でそれが確認された。恐らくは以前からあつた胃潰瘍が急性に増悪したものと考えられる。平滑筋鎮痙剤を疼痛時に使用したが、予想外の病氣であり、他の適当な薬剤をもつていなかつた。

B 隊員は高所でビバークを経験した後、顔面に高度な浮腫を生じた。ベースキャンプに帰つてから急速に消退の傾向が表われた。他隊より入手した利尿剤（ラシックス）を使用した。また第三手指先端に黒変を併り凍傷があり、ロニニールタイムスパン、カピランを使用し下山後治療した。

C 隊員は入山前から軽度の感冒があり、入山後もほぼ二週間にわたつて継続した。さらに不眠と夜間の呼吸困難を訴え、上部キャンプへ行くほど増強し、押え難い不安にかられたという。頂上アタックの最終行動に入る前、ベースキャンプでもその症状が起り、一種の神経症と考えられる。この種の症状は軽度のものな

らほとんど全員が経験したことであろう。日昼の言動、登山活動は全く正常でグループ最強と思われた。登頂に成功したひとりである。睡眠剤と精神安定剤を連用した。

D 隊員。入山後の数日は他の多くの隊員も同様であつたが、ベースキャンプで安静時の息切れを感じた。ベースキャンプ二日目のソ連人医師による健診で血圧一五五・九二脈拍一〇八と記録された。平常は血圧一二〇・一六〇mmHg前後、脈拍七〇前後である。入山一五日後、血圧一三〇・一七〇mmHg、脈拍九〇であつた。その時点では既に五三〇〇メートルを経験しており、高度順化したものと考えられる。

新しい高度を経験した際の頭痛、息切れなど軽度のものにはほぼ全員が経験しているが、強い高度障害はなかつた。行動中の全隊員の健康状態の把握は不可能に近いにせよ、私の力の至らなさにもかかわらず、隊員に重大な疾患や事故のなかつたことは誠に幸いであつた。

会計報告

加藤勝久

4 ●

「隊員共託金」は、新大山の会会員九人から各三〇万円、大阪外大山岳会会員三人から各二九万円、新大

装備

斎藤一弥

山岳部員二人とモスクワの田村隊員から各五万円集めた。

「寄付金」は主に新大山の会会員から援助していただいたもの。

「原稿料・出演料」は新聞、雑誌などのほか、NHK(TV)、BSN(同)、モスクワ放送(ラジオ)などの出演料が含まれている。

「装備等売却金」は、使用せずに持ち帰った雑品を売った代金。

「キャンプ・パミール・クーボン券代」とは、モスクワとパミールでの滞在費で、一人につき七五〇米ドル(二一万二二五〇円)を一五人分、ソ連山岳連盟に支払った。当初、隊員は合計一六人の予定で、このほかモスクワで田村隊員が直接ソ連山岳連盟に七五〇米ドルを払い込んだ。

その後、隊員が一五人に減って、一人分キャンセルしたのだが、結局返金されなかった。キャンプ・パミールの要項には「返金する」と記載されており、モスクワでも後日送金するといっていたのだが、いまだに受け取っていない。

「共同装備購入費」が三〇万円と意外に安くついたのは、テントその他を新潟大学や新大山の会会員から借りることが出来たため。またスポーツ用品店などから寄贈を受けた装備もかなりあった。

「食料品購入費」は主に高所用と

して日本食を持参した。

「装備等輸送費」は新潟 東京モスクワの往復運賃で、流失装備がかなりあったので、帰路の分は二〇%にも満たない。

「通信費」は国際電話・電報代が大部分を占める。

「雑費」には、文書作成費、諸手数料、保険金、モスクワでの残留隊員二人の一泊宿泊費などが含まれている。

「キャンプ・クリミア・経費負担金」は、一九七〇年にパミール入山交渉の目的を持って新大山の会から二人がクリミアの岩登り大会に参加し、このときの費用が新大山の会の負債となって残っていたので、パミール登山隊の一部を肩替わりした。

「隊員壮行会経費」は、出発前にお世話になった新大関係者らを新大山の会が招いて開催したもので、その経費の一部を負担した。

「流失装備補償費」は、雪崩で失なった共同装備扱いの個人装備について補償したもので、補償事務は完了していない。

「登頂記念写真展経費」は、全紙パネル一〇〇枚(カラー四〇枚)の規模で展示した経費で、後援者からかなりの援助があり、持ち出し分が一三万円。

今回の遠征内容、予算の幅より、現有装備の有効利用、軽量化、輸送の簡易化の三点を基本方針として計画・調達を行なった。

その調達は借用できる物はすべて借用した。また提供も少なからず受けた。購入については、時間的余裕の少なかつたこともあるが、研究不足な点が多く、予算の使い方は良いとはいえなかつた。大量に余った電池等の消耗品に多くが費されていた。軽量化については、我々の予算での調達可能な範囲では、選択の自由はあまりなかつた、というのが実情であり、特別な装備を調達することは出来なかつた。軽量化といえども装備一つ一つについてはその限界があり、それよりも、数量において無駄を少なくすることが、まず第一だと思われる。遠征が大人数、長期になればなるほど、荷上量が使用量より大きく上回るものであるが、その差をいかに小さくするかというところが問題となってくる。従ってタクトイクスの正確さが大きく軽量化に影響する。結果として、この点についても軽量化が達成されていたとはいえないが、装備の余裕の持つ安全

性との関連において、これらの両者は矛盾するものであり、終わることのない課題かも知れない。

輸送の簡易化については出発前の発送時には別に問題となるものはないが、ブタンガスのカートリッジもすっかりした梱包を行なったので空輸することができた。しかし返送時の梱包材料の不足は問題であった。発送時の梱包に使われた木製の箱を返送時にも使用する予定であったが、サイズが大きすぎたために国内線の飛行機に乗らず、モスクワで解体されてしまったのであった。雪崩でかなりの装備を失ったことが、皮肉にも大きな現実問題とはならなかつた。全共同装備の重量は、約三〇〇キロと一五名の遠征隊としてはかなり少ないが、これはベースキャンプ用シェルパ用の装備が不要だった理由もあるが、すべての装備を使い切れなかつたという結果より、その効率はまだ高められる余地があつたといえる。

登山期間が夏季であることから、防寒については気象条件の類似しているヒンドゥクシュ遠征などの報告を参照して考慮した。消耗度についても、一カ月という短期間であるので、大きく考慮する必要はないと考えられた。そして選択・購入については、隊員個人に任せ、すべて市販

品で、特別に製作依頼した物はなかつた。大体において日本の冬山の場合と大差なく、その程度で十分と思われた結果、それでほぼ間に合った。

登山靴については半数以上がシングルで、ダブルブーツも市販品であった。登山活動の大部分は六〇〇メートル以下であり、その高度以下では重いダブルはその機能を必要とされなかつた。レーニン峰登頂者六名のうち、四名までもシングル着用だったが、凍傷を負った者はなかつた。シングルの場合、オーバーシューズは絶対必要である。衣服については、ウール製品の重ね着というだけで、日本の冬山の時とさほど変わらず、寝袋も羽毛製というだけで、一般的なものばかりであつたが、寒さに悩まされることもなかつた。

以上の様を個人装備であるが、六五〇メートルでのピバークで、一名が指に軽い凍傷を負つたというのが唯一の凍傷事故だつた。極寒、強風時に長時間の行動を強いられることのなかつたという幸運もあるうが、ほぼ適切な計画であつたと思つてゐる。

テントはミード型ウインパーを六張、内訳は八人用・三人用を一張りずつ、五人用・六人用を二張りずつである。それに軽量のテントに外張りをつけただけで、三人用・四人用

の二張りを加えた。ウインパーは、いづれも日本で使用しているナイロン布地の一般的なもので、しかも、新品は二張りのみで、他はかなり使い込んだものであつた。高所の使用に十分堪えるとはいへない難いテントがほとんどであつたが、予算の都合上これらを持参する以外になかつた。高所用テントには、耐強風性、軽量であること、設営の容易さの三点がまず要求される。耐強風性は、構造上だけの問題ではなく、布地自体の紫外線による劣化現象という問題もある。

従つて、高所用テントの設計、選択には以上の点に十分な注意を払う必要がある。我々の場合、性能を数量において補うという甚だ不合理な計画だつた。

我々の荷上げ能力では、予備用ウインパーを荷上げする余裕はなかつた。G₁(五五〇メートル)以下の比較的低所のテントには、前述の諸性能はあまり必要ではなく、滞在日数も長いので、居住性の良いことが第一である。G₁用に使つた八人用ウインパーにフライシートを加えたのは、強烈な日差しとみぞれに対して非常に有効だつた。

軽量のテントは、商品名をアクションテントといい、遠征までにテストの機会を持つてなかつたので、中間キャンプおよび予備用としての使

用を計画していた。登攀活動が進むにつれ、我々の荷上げ能力の程度を知り、このテントの、軽量ながら耐強風性、設営の容易さなども秀れていることに注目するようになった。

その後、起つた雪崩によつて、三人用、六人用のウインパーと軽量テント二張りも失い、全員登頂の計画から、少人数による短期決戦型へと変更せざるを得なくなつた。余る日数から、ウインパーは使用せず、ベースでの倉庫になり果ててしまつた。結局五張用意したウインパーのうち、まともに使つたのは八人用の一張りだけで、結果的に大きな無駄となつた。また、倉庫用はそれとして、夏用テントを用意すべきであつた。

再行動に移る際、どれほど軽量テントを失つたことを悔まれたかしのない。六〇〇以上の設営に耐えられるかは確言できないが、重量においてミード型ウインパーの半分以下という、この種の軽量テントは、今後のラクトエクスペディションやシエルパレス登山に大いに利用されることと予想される。

テントの床に敷く断熱材には、トールレベフという、発泡ポリエチレン系のマットレスを使用した。厚さの十ミリ・六ミリ共に断熱性、防水性は抜群で、かさばらぬ六ミリで十分だつた。強度に若干問題があるが、硬い靴で歩いたりしなければ、一カ

月位の使用には堪えうると思う。

ザイルはアンザイル用として九ミリ四〇メートルを常時二人ごと一本使用できる数として八本、フィックス用ザイルとして七ミリナイロンと八ミリクレモナを合わせて約三〇〇メートル用意した。当初の計画であつたクルイレニコ峠經由ルートでは十分足りるとした。実際はアイスフォールにおいても、フィックスは四〇メートル行なつたのみで、それ以外はコンティニューアス歩行で通過していた。クレバスにかかるスノーブリッジを這つて渡つていたことを思うと、もつとフィックスすべきだつたかも知れないが、フィックス・ザイル使用量が少ないのは、シエルパレスや小規模登山の特徴でもあろう。またルートの容易さに依るところも大きかつた。レブキン稜經由およびラズジェリナヤ峰經由ルートにおいては、フィックスの必要は全くなかつた。アンザイル用ザイルとして予定の九ミリナイロンは重く敬遠され、この用途としては危険と思われるが、もつぱら七ミリナイロンが好んで使用された。八ミリが適当なところではないかという気がする。

ハーケン類、スノーバー等の金具類も、予想したよりルートが容易で、ほとんど使用されなかつた。パイプ

スクリュウ型のアイスハーケンだけは、氷に對し有効で信頼性が高いので常に持ち歩いた。パミールでは、雪のすぐ下は硬い氷の層になっていくところが多く、またそうなっていないところも、雪質からスノーバーはあまり役に立たないようだった。

パーナーはなじみのホエーブスと

ブタンガスパーナーを用意した。ブタンガスパーナーは低温下でも、高所では気圧で低いので使用可能であり、取り扱いが簡単なことから、最終キャンプでの使用を予定していたが、これも雪崩で失い、その機能性の恩恵にあずかることも出来なかった。ホエーブスは市販品のままであるが、六六〇〇メートルのキャンプにおいても、その火力を十分維持していた。小さい七二五型は故障が少ないが、容量が小さいので補給回数が多くなるのがめんどろである。好みに応じて使い分けたいと思う。

ガンリンはベースで支給され、制限なく使用できた。常時四台、一日四時間使用すると見込んで、全部で一二〇リットルを計算していたが、食事の支給されるベースでの滞在日数が当初の計画より長く、また雪崩による計画の変更のため、総使用量は三〇〇リットルであろうと思われる。荷上げ量はこれよりも多いが、それでもガンリン容器は半分以

上余った。一人一日当りの使用量は日本の冬山の場合とほぼ同量の一三〇〜一五〇ccであった。ベースでの使用がなかったのはこの遠征の特異なところである。ヘッドランプ用電池、ローソクなどもベースでの自家発電による照明が完備され、しかも日照時間が長いので、用意した量の三分の一も使用されなかった。

トランシーバーは、ベース用に一台、キャンプ用および行動用に五台用意した。しかし、最初に当局より使用禁止の通告を受け、抗議したが受け入れられず、ソ連製のオモチャのようなものを緊急用として各隊に一つ支給された。禁止の理由は国境に近いからということであったが、その代用品を渡されたことは不可解である。

雪崩やアクシデントの統発によって使用を許されるまで、トランシーバーによる通信は行なえず、隊員の口述と通信用カードによって行なわれた。

しかし、この手段では詳細まで伝わらず、また意志の疎通もすれ違ふことが多く、トラブルの原因の一つになつたと考えられる。使用したトランシーバーはナショナルとソニーの製品であるが、その性能はソニーの新製品の方がやや良かった。ソ連側より借用の依頼を受けたほどであ

る。

通信用カードは、トランシーバーの交信記録と毎日の荷上げ計画用として用意したのだが、研究不足もあってその目的ではあまり有効に使用できなかった。カード類の使用については、その方法によってタクティクスの推進、情報整理に非常に役立つものになると思われる。

カメラは八ミリ映写機二台、三五ミリカメラ十台、六×六版カメラ一台を持参したが、その使用はほとんど個人に任せていたので計画性に欠け雑然としていたが、八ミリを除き集録したフィルムの数においてはま

キャンブ滞在日数は時により大きく変化するので、コップフェルはすべて四人用にし、それを組み合わせて使用するように計画した。炊事に要する時間も短くて済むと考えた。しかし、多人数の時はやはり大きなナベが望まれた。テルモスは十個用意したが四個は未使用のままであった。

さまざまなものを用意したが大半は未使用のままだった。比較的使用回数の多かったのは、バネバカリ、キャンバスバッグ、ビニール袋、マジックインキなどであった。整備を整理したりする大袋としてキャンバスバッグを用意したのだが、小さな袋も多く必要だった。

本パミール登山にあつたての食糧の特徴は、キャンブ、登山期間中の食糧はすべて主催者ソ連アルピニズム連盟から支給される事となつていた。ソ連のキャンブ・パミールに関するパンフレットによれば、キャンブ滞在中は三食キャンブ食堂で、登山期間中は一般的な食糧セット（砂糖、茶、コーヒー、ミルク、チョコレート、チーズ、ソーセージ、穀物）の中から登山者の選択による事となつていた。これらの食糧セットが、日本的な登山に用いるインスタント的な物か、一般的に家庭で用いる調理の必要な物かなど詳細についてはわからなかった。ともかく基本的には支給される物を使用し、長期にわたる登山期間中の、特に高所における食欲不振を補うため、純日本的な食物を、食欲増進剂的な考えで日本から持参する事とした。

前記の基本的な考えに立ち、食糧購入費、輸送料（航空便で送つたので食糧購入費以上かかった）を考慮し、総重量四二キロ、金額四万五千円相当の物を送った。購入計画に当つては各隊員の希望を聞き、し好的な面を第一とし、カロリーの面は

いっさい考慮しなかった。別紙食糧リストを参照の事。

モスクワ滞在中はホテル住いなので、ソ連のホテルの普通食以上の食事が出た。ベースキャンプでの食事は、大きな食堂用テント内で各国一堂に会しセルフサービスで行なわれた。

食事の種類は黒パンを主食とし、スープ、シチュー系の食事が主だった。時にバターなどで味付けしたおかげのような米食が出た。一般的に非常に油っぽくあまり口にあわなかったが、一部隊員を除き外国隊員に劣らず食欲はあつたようだ。ただ果物と食後の飲物はおいしかった。

食事時間は朝食八時半、昼食午後二時半、夕食同八時半と決められた。登山活動のため早立ちの場合やキャンプへの帰りが遅くなった時には食事でありつづくに苦労した。

さて登山活動に入る時たいへん困難な問題に直面した。それは行動用食糧の支給を受けるにあたり、登山計画（隊員の行動計画）にあわせた食糧計画を立ててリストを作り、それを食糧担当係員に提出、チェックをうけ、それを持って倉庫係より食糧の支給を受けるというシステムであった。食糧品の一覧リストはロシア語で書かれており、また登山計画、食糧リストすべてロシア語で書いて



ラズジェリナヤ峰5500m 付近を登る

提出する必要があつた。ロシア語の解せぬ私にはどうしようもなく、田村隊員に全面的に世話になり、食糧係は田村隊員に移つたようなものであつた。

次の問題として、我々は極地法によるレーニン峰アタックを計画していたので、登山期間中に必要な食糧を一度に支給を受け、それを各キャンプ各々に分けてバックし荷上げする予定でいた。ところが各人の行動計画にあわせた食糧しか支給しないし、一度に全部は支給しないのとどであった。我々は極地法の行動人員計画を提出し食糧リストを出したところが極地法を理解させることが困難であつた。

ソ連の登山形式として七〇〇メートルの山は五月から一週間単位で

全員一緒に高度順化のための登山を行ない、ベースキャンプへ一度全員下り、数日休養の後また一週間位の日程で全員一緒に頂上アタックを行なうという方法が一般的で、極地法の複雑な人員配置計画は理解されなかつた。

とにかく食糧の支給を受けねばならないので、五日間くらいに区切って簡単な行動計画を提出し、多目に支給を受けることとした。支給された食糧を見てびっくりした。黒パンは一斤単位、バター、チーズはキロ単位で大塊から切りとり包装なしのまま、またソーセージは直径六センチ長さ六〇センチの大型のものであつた。我々が日本的に考えていたコンパクトにバックされているものは大違いであつた。支給された品り

ストは別紙参照）を細かく分割し、日本より持参したポリエチレン袋やサランラップなどでキャンプごとに梱包した。クルイレンコ峠ルートの雪崩でルートを変えた後は、ラツシユタクテックス的な登山方式に変更せざるをえず、行動日数にあわせて必要な量を持って登山することとなり、複雑な食糧の分割梱包の必要はなくなつた。

日本より持参した食糧は雪崩で Q_2 用の物が流された。残つたベースキャンプ用、 Q_3 、 Q_4 用の物をリブキン、ラズジェリナヤ両隊に分けた。両隊とも登山期間が八月一〇日と決められ、ラツシユタクテックスによるレーニン峰アタックのため Q_2 、 Q_3 の滞在日数が少なくなり、 Q_2 、 Q_3 では日本食を中心とする献立とするこゝとができた。

最後に持参した日本食はすべて好評であつた。ただしカロリーの面から批判もあつたが、今度の登山は食糧はすべて支給されることからしてしかたのないことと考へている。ただ Q_4 （六八〇〇メートル）で日本食を主に食べていると、もつとココのあるものが食べなくなつたことを思うと、高所登山においては日常よく口にしている食物でカロリーもありバランスのとれた食糧が大切だと思ふ。

パミール探検小史

(巻末地図参照)

●田村俊介

パミールは古来東西交渉を妨げる大障壁であった。しかし、パミールの北端と南端には、いわゆるシルク・ロードと名付けられる通商路が古くから存在していたことが、東西交渉史の研究者達によって明らかにされている。

北端の道は、中国領カシガルとタジクスタンのドウシヤンベ、更にはアフガニスタンのバルクなどを結ぶ、大雑把に言えば、アライ山脈とザアライ山脈を南北に分けているキイズイル・スウ河(アライ谷)に沿う道と、もう一つはアライ山脈の東北端にある時(テレク・ダワン峠など)を越し、東のカシガル、北西のフェルガーナ盆地に出る道である。南端の道は、中国領タシクウルガンとヒンズクシ北端のアフガニスタンやパキスタン北部を結ぶ、アリチユール川、パミール川、ワハン・ダリヤ川に沿うものである。この南端の道、特にパミール川に沿う道は、

七世紀に玄奘、十三世紀にマルコ・ポーロが通過したことで、あまねく知られている。

だが、いずれの道も、パミールの核心部からはなかに離れており、この核心部への探検は一九世紀後半になつてようやく活発になつてくる。この探検はロシアの南下政策とイギリスの北上政策に密接に関連しているのである。イギリスより地の理を得たロシアの探検家達の活躍は、ロシア帝国の南下政策に呼応し、積極的かつ果敢であった。これから以下、ロシア・ソ連の探検家、登山家の活躍を軸に、パミールの探検史をみて行くことにする。

ロシア帝国時代の探検

1/パミール東部地域の探検

パミール北端を最初に横切つた記録がはじめて現れるのは、玄奘やマルコ・ポーロがパミール南端を横断

したのよりはるか後の、十八世紀の後半である。ロシア軍部の下士官フリック・エフレーモフは一七七四年、ブハラ汗国に捕われた。当時、

ロシア帝国の勢力はまだ西トルケスタンまで及んでいなかった。望郷の思いに駆られ、エフレーモフは、ブハラより逃亡し、フェルガーナ盆地のオーシから、今は廢道になつているテレク・ダワン峠を越え、カシガルへ、更にはカラコルムまで達した。彼はロシアに帰り、この一七七四―一八二年の逃亡行について「九年間の彷徨」と題する本を書いている。エフレーモフの後、北面からパミールに入つた記録は百年間とだえてゐる。やつと一八七一年になつて、パミール北面のアライ山脈に、ロシアの若い自然科学者、アレクセイ・フェドチェンコがやつて来た。フェドチェンコは時のトルケスタン総督カウフマンのコーカンド汗国フウドヤル汗あての推薦状を携えていた。

カウフマン將軍は、ロシアの中央アジア進出史上、有名な軍人である。

当時、ロシアの南下政策とイギリスの北上政策が、国境線の定かでない東西トルケスタンで激しく対立する兆しを見せていた。カウフマン將軍はロシアの南下政策の一環として、広く中央アジアの學術調査を行うことを企てていた。フェドチェンコは總督の庇護のもとに、一八六八―七一年の間に三回の中央アジア踏査を行い、一八七一年六月、アライ山脈踏査を企てた。当時、彼は二七才であった。この旅に最愛の妻オリガも同行した。彼はフェルガーナ盆地のホージェントから、アライ山脈に水源を持つイスフアラ、ソフ、アクスウの各川を西から順に遊行し、アライ山脈の稜線に出ようとしたが、果せなかつた。最後の試みとして、イスフアイラムサイ川を遊行し、やつとの思いで、三六〇メートルのテングスパイ峠の上に出ることに成功した。ここから彼は広々とした平原となつたアライ谷を隔てた向うに、東西に延びる雪の連山(ザアライ山脈)を万感をこめて見渡したのだつた。当時、アライ山脈の南には南北に走る、ポロールという大山脈が存在するといふ、ドイツの著名な地理学者、フンボルトの仮説が地理学界では支配的であつた。フェドチェンコはこれを見事に覆した。彼は更に



ベース・キャンプ周辺を行くキルギス人

アライ山脈の南斜面を下り、アライ谷に降りた。ここにはコーカンド汗国によって造られた要塞ドラウト・クウルガンがあった。彼はアライ山脈の南に屹立する大山脈をザアライ山脈（アライ山脈後方の山脈）と名付け、又この山脈上の白く聳えるピラミダルな最高峰を、彼の踏査行の庇護者トルケスタンの総督の名をとりカウフマン峯（現在のレーニン峯）と名付けた。彼は更にザアライ山脈

の稜線にまで足を伸ばそうとしたが、コーカンド汗国のキルギス人の反対にあり、これは断念した。その後、ロシア帝国は中央アジアの諸汗国を次々に合併し、更にはインド、アフガニスタンと境を接するパミールの奥深く入り込むことを目論んだ。こうして一八七〇年後半にはロシアの將校を伴う踏査隊が、ピヤンジ川やワハン・ダリヤに進出することになるのである。

この軍部の派遣した踏査隊の一つに加ったのがニコライ・セーヴェルツェフである。セーヴェルツェフは一八七七年アライ山脈をタルディク峠、ザアライ山脈をキイズイル・アルト峠で越え、マルカン・スウ川にまで達したが、九月の到来と共に山は雪となり、カラ・クウリ湖にまで達することができずにオーシに引き返した。翌一八七八年、再びパミールを目指した彼は、今度はカラ・クウリ湖を通り、更にはアリチュル川を西行し、ヤシリ・クウリ湖にまで達した。彼の踏査行までは、パミールは天山と同山系であると考えられていたが、この調査旅行の結果、彼はパミールが独立した山系であることをはじめて証明した。

一方、セーヴェルツェフ踏査行の前年の一八七六年、パミールの正面玄関とも言うべきドラウト・クウルガンから、ザアライ山脈のテルサガル峠に最初に登ったのは、測量技師のジーリンであった。

翌一八七七年には、トルキスタンの探検家ムシケトフがテレサガル峠を越え、アルティン・マザルにやって来たが、ムウク・スウの源流をきわめるに至らなかった。

一八七八年、V・オシャニンが隊がテレサガル峠を越え、このアルティン・マザルに降りて来た。オシャニンはザアライ山脈の命名者フ

エドチエンコとは、モスクワ大学の学友だった。彼は出発地点のサマルカンドからドラウト・クウルガンまで、ドウシヤンベ、カラテギン地方を通り、スウル・ホブ川を遡行する昔のキャラバン・ルートを利用した。途中、彼はスウルホブの南に東西に続く長大な山脈を、ピョートル一世山脈と名付けた。又、ピョートル一世山脈の南のオビ・ヒンゴウ川を隔てて聳える山脈を、ダルワズ山脈と名付けたのも彼であった。オシャニンはスウルホブの南支流ムウク・スウをつめて、東パミールに出ようとしたが、これは失敗に終わった。しかし、彼はムウク・スウより南に直角に折れたこの一支流で巨大な氷河の舌端を見付けた。彼は氷河の舌端まで登り、この氷河をアライ山脈を越えてはじめて世にザアライ山脈の存在を伝えた、学友フエドチエンコの名をとってフエドチエンコと名付けた。だがその時は、彼はこの氷河が世界最長の山岳氷河であることには勿論気付かなかった。

英国人が最初にパミールに足跡を残したのは、一八世紀前半であった。一八三八年、ジョン・ウッド中尉はパミール南面のインカシムからパミールを遡行しゾル・クウリ湖に達し、これをグイクトリア湖と名付けた。又一八七四年、フォーサイス卿の第

三回カシガル訪問使節団に属したト
ロッター大尉、ゴードン中尉等が東
パミールのカラ・クウリ湖やラング
・クウリ湖周辺に入っている。

日本人西徳二郎も一八八〇年に、
パミール北面にやって来ている。西
徳二郎は初代駐露全權大使榎本武揚
がシベリアを横断して帰国の途につ
いた後、一八七八年より駐露臨時代
理公使として、その任に當っていた。
一八八〇年、その任を解かれ、帰国
するに當り、彼は長大きわまりない
中央アジア シベリア 蒙古 中国
を經るルートを探査することを企て
た。その途中、フェドチェンコがア
ライ山脈のテンギズバイ峠に向つた

のと同じルートである、イスフアイ
ラム川を遡行し、アライ山脈北面に
まで足を踏み入れている。当時、ロ
シヤ人でさえ入り込むことの容易で
ない、この僻遠の地に日本人が唯一
人で足跡を残していることは、驚嘆
に値する。

セーヴェルツォフ隊の東パミール
踏査行より五年後の一八八三年、再
びパミールにやって来たのは、プチ
ヤータ大尉を隊長とする大規模なロ
シヤ探検隊であった。プチャータ隊
はカラ・クウリ湖を経て、パミール
川の源流にまで足を伸ばした。そし
て、帰途にはカラ・クウリ湖を南で
迂回し、タフタ・コルウム峠、ヤン

ギ・ダワン峠、カインデイ峠を越え
て、アルティン・マザルに出た。こ
れは東パミールとアルティン・マザ
ルを結ぶ最初のパミール中央部の踏
査行となつた。この踏査行以後、約
二〇年間ロシアの組織的な探検隊は
パミールに入らなかつた。

しかし、ロシア軍部は一八八〇年
の後半、グロムプチェフスキ大尉
やイオノフ大佐を隊長とする警備隊
を、東パミールに派遣し、イオノフ
大佐は一八九一年ムウルガブにパミ
ール・ポストを常設し、イギリス勢
の北上西進に対しパミール南東部を
固めた。

一方、一八八〇年代より一九〇〇
年初頭にかけて、カラ・クウリ湖や
ゾル・クウリ湖周辺のパミール東南
部に入り込むヨーロッパ人が次第に
多くなつた。英人ネイ・エライアス、
リトルデール、ヤングハズバンド、
仏人ボンヴァロ、スウェーデン人の
スウェン・ヘディン等である。ヤン
グハズバンドや彼の部下ダビドソン
中尉が、前述のイオノフ大佐とパミ
ール東南部で衝突し、強制留置や追
放を受けたのもこの時期である。

だが、一八九五年には、英国とロ
シアのパミール国境画定委員会によ
つて、パミールの国境が設定された。
それによつて、ワハン・ダリヤ(ワ
ハン回廊)がアフガニスタン領とな
つたのは、インドを経て南からパミ

ールに迫るイギリスと、パミールを南
下して来るロシアが、直接国境線を
接して紛争を起すことがないように
緩衝地帯が設定されたのである。

二〇世紀に入り、東トルキスタン
の調査に向つた日本隊がパミール北
端を横断した。大谷光瑞を隊長とす
る第一次大谷探検隊は、ロンドンか
らベテルブルク、バクー、サマル
カンドを経てオーシに着いたのは一
九〇二年九月であつた。彼等はテレ
ク・ダワン峠でアライ山脈を越えパ
ミール北端を横断して、ヤルカンド
に向つた。一八八〇年に西徳二郎が
パミール北部に足を踏み入れてより
二三年を経て、再び日本人がパミ
ールを通過した。

一九〇四年、ロシアの著名な地理
学者コルジェネフスキイは、一八七
一年にオシヤニンが試みた古いキャ
ラバン道を、今度は逆にアルティン
・マザルからムウク・スウとスウル
ホブに沿つて下り、カラテギンに達
した。その後、後述するように、彼
は数回にわたりフェドチェンコ氷河
に入つたり、ムウルガブよりタヌイ
マス氷河にまで足を延ばした。

一九〇九年、測量技師N・コシネ
ンコはアルティン・マザルよりフェ
ドチェンコ氷河の舌端にやって来た。
彼の目的は、ここからピヤンジ川の
支流ワンチ谷の上部に通じていると
古くから原地人の噂にのぼっている、

カシガル・アヤク峠を発見すること
であつた。彼は氷河に沿つて南下し、
氷河の左支流の基部でビヴアクし、
この左支流を後にビヴアク氷河と名
付けた。一向はこのビヴアク氷河の
上部で石を積み上げたケルンを発見
した。これは、既に原地人が少なく
ともこの地点までやって来ているこ
とを証明していた。彼はこの踏査行
で、フェドチェンコ氷河の西をくぎ

る山脈のとおる鞍部に達したが、悪
天候のため果してこれがワンチ谷に
通じる噂のカシガル・アヤク峠かど
うか、確認することはできなかった。
ビヴアク地に帰つた彼は、今度は一
八七八年にオシヤニンが失敗した、
ムウク・スウの上流をつめて東パミ
ールに出る試みを再度目論んだ。こ
のルートは既に一八八三年、プチャ
ータ隊によつて逆のルート、即ち東
パミールからアルティン・マザルに
出るルートで踏査されてはいた。コ
シネンコはムウク・スウの支流バリ
ヤンド・キイクを東に向つて遡行し、
タフタ・コルウム峠を越え、東パミ
ールの広い谷に出ることに成功した。

ここから一向はグウダラ谷、ドルタ
ング川を下り、ピヤンジ川のすぐ手
前でヤズグウレム山脈を北へ越え、
ヤズグウレム川へ出た。ここからピ
ヤンジ川に沿つて下り、北へ順にワ
ンチ谷、ヒンゴウ谷を横切り、スル
ホブ川を遡行しアライ谷に出るとい

う、パミール中心部にコンパスの針を突き差し円を描くようなパミール一周の大踏査を実行した。

コシネンコが、そのごく一部を通過したパミール西端を区切るピヤンジ川に沿って行くルートは、非常に困難で長い間通過不可能とされていた。これを最初に遡行したのは植物学者A・レーグリーである。一八八一年、彼は測量技師D・コシャコフと山地ダルワズ汗国の中心地カラ・イ・フウンブで越冬し、翌八二年の春、ピヤンジ上流に向った。ワンチ川との合流点で、コシャコフは病気のため引き返し、レーグリーは一人で困難な旅を続けた。彼はルシヤン、ジャフダリン汗国まで達し、ピヤンジ川の西方にあるシヴァ湖にも足を踏み入れた。

中央アジアの代表的探検家A・スタインも画期的なパミール一周踏査を行っていた。彼は第三回の踏査行で楼蘭、敦煌、エツイン、ゴルを訪れた後、一九一五年カシガルからアライ谷を下りダラウト・クウルガンにやって来た。ここからテルサガル峠を越えアルティン・マザルに下り、パリアンド・キイク川を遡行しタフタ・コルウム峠を越えタヌイマスに

下り、サレズ湖に達した。ここまではコシネンコのルートと同じである。

サレズ湖からは更にリヤンガル峠を越えヤシリ・クウリ湖に出て南進し、南アルチュール山脈を越えて、ゾル・クウリ湖まで達した。そのルートが示す通り彼は文字通りパミールを北南に縦断踏査した。ゾル・クウリ湖からは玄奘、ポーロの道であるパミール川を下り、ワハン・ダリヤとの交流点リヤンガルに出た。その後、ピヤンジに沿って下り、イシカシムを経てホログに着いた。ホログからシャフ・ダラ川を再び東進し、ドウザフ・ダラ峠でシュグナン山脈を北へ越え、グウント川を羊皮をふくらませた筏で下り再びホログに返った。ここからピヤンジ川に沿ってルウシヤン、ヤズグウレム、ワンチ、ダルワズの各山脈の西端を越えオビ・ヒンゴウ川に出て、ドウシヤンベに抜け出した。これはコシネンコのパミール踏査に更に輪をかけて驚くべき大踏査行であった。

2 / パミール西部地域の探検

東パミールが次第に明確になり、パミール中央部のフェドチェンコ氷河下部もその輪郭を現わし始めていた。しかし、フェドチェンコ上部や、パミールの核心部にあると原本人に噂されているガルモ峯周辺部やその西部は、依然として未知のままであ

った。

この西の部分は一八九九年、有名な植物学者V・リブスキイによりわずかに探られていただけだった。リブスキイはオビ・ヒンゴウ川を遡行し、ビョートル一世山脈の南麓から北へこれを乗越して、スウルホブ川に出、ムウクスウの支流サグラン谷に入りこんだ。

スタインのパミール大踏査行の二年前の一九一三年にW・リックマースを隊長とする独塊山岳会の遠征隊がオビ・ヒンゴウに入った。リックマースは既に数回、中央アジアやパミールを踏査しており、パミールに憑かれた人であった。一向はオビ・ヒンゴウよりガルモ氷河上部にまで入り、ビョートル一世山脈の五千メートル峯数座に初登頂した。そして一世山脈をベーシー峠で越えて、かつてリブスキイが入り込んだサグラン氷河の上部に出た。

この独塊山岳会に引き続き、ロシア地理学協会の探検隊がパミールに入った。天文学者のY・ペリヤーエフと測量技師のベゼージンの一向はテンギズバイ峠よりダラウト・クウルガンに下り、アライ谷に沿って西行し、ビョートル一世山脈をガルダニ・カフタル峠で南へ乗越し、オビ・ヒンゴウ川に出た。一向はこの川を遡行してガルモ谷に入り、バシム

ガル部落に着いた。ここからガルモ

氷河に出、これが三つの氷河に分れる分岐点に達した。ペリヤーエフは分岐点の奥に聳える峻峯をガルモ峯と考えたが、これはガルモ峯ではなく無名峯で、後にペリヤーエフ峯と名付けられた。三つの枝氷河の中の主氷河は後にペリヤーエフ氷河と名付けられた。この主氷河は、実はソ連の最高峯(コムニズム峯、当時は未確認)の南西壁の基部にまで喰い込んでいたのだが、一向はクレヴァスにはばまれて、氷河の分岐点より奥へ分け入ることができなかった。

ロシア革命で一時パミール探検は中断されたが、コルジェネフスキイは前述した一九〇三、一九〇四年やその後数度にわたるムウク・スウ及びフェドチェンコ氷河の探査の結果を発表した。これにより、アルティン・マザルの南に聳えるムウズジルが峯より南々西に延びる大山脈が明確に位置づけられ、この山脈はフェドチェンコ氷河とワンチ及びガルモ谷を東西に分けていることが確定した。そして、彼はこの山脈を科学アカデミ山脈と名付けた。又一九一〇年、同山脈の支稜上に七千メートル峯を発見し、これに彼の妻の名を冠し、コルジェネフスカヤ峯(七一〇五メートル)と名付けた。

ロシア革命後の探検登山

しかし、まだパミールの核心部に

は多くの空白部が残されていた。これらの解明はロシア革命の嵐が治まるまで持ち越された。一九二八—一九三三年の間に組織された。ソ連科学アカデミー遠征隊はバミールの殆んど全域にわたる踏査を企てた。

一九二八年に組織された遠征隊は、ソ連科学アカデミーとドイツ科学振興協会の合同隊で、その隊員は百名を越え、バミール探検史上最大の規模を誇るものであった。ソ連隊の中には、前述のクルジエネフスキ、ペリヤーエフ、それに後のソ連科学アカデミー副会長で、北極航路で有名を駆せたシビリヤコフ号の総指揮者オット・シュミット博士、革命直後の軍部最高司令官で後に検事総長になったクルイレンコ等がいた。この遠征でバミールに魅せられたクルイレンコはその後も引き続き四度、バミール遠征隊を導くことになる。ドイツ隊の隊長はかのリック・マースであった。遠征隊はカラ・クウリ湖からタヌイマスを通り、東南からフエドチェンコ氷河の上部に出た。そしてこの氷河をアルティン・マザルまで下り、ここに七二キロに及ぶフエドチェンコ氷河が世界最長の山岳氷河であることをはじめ確認した。フエドチェンコ氷河をワランチ谷、ヤズグウレム谷と結ぶ峠—カシヤル・アヤク峠とヤズグウレム峠—が科学アカデミー山脈上にあると古くから

噂されていたが、この二つの峠も発見した。この峠を越えて同山脈の西部のワランチ谷やヤズグウレム谷も踏査された。この踏査行でザアライ山脈の最高峰カウフマン峯はレーニン峯と改名され、同峯北面の氷河がレーニン氷河と名付けられた。

一方、ドイツ隊のアルウィン、ウイン、シュナイダーの三名は南面の大サウクダラ氷河よりレーニン峯東稜を経て、このレーニン峯に初登頂した。

一九二九年のクルイレンコ隊は前年のドイツ隊のルートからレーニン峯登頂を試みたが失敗に終わった。彼等はレーニン峯東稜上の鞍部を越えて北面のレーニン氷河へ下降したが、この時この鞍部をクルイレンコ峠と名付けた。

一九三〇年にはソ連隊は科学アカデミー山脈の西部に入り込んだが、この前後より、科学アカデミー山脈上に七千メートルを越える高峯があることにアルビニスト達は気付き始めていた。だがこの山は遠くからでも見える同山脈上のガルモ峯（六五九五メートル）と混同され、謎の山とされていた。

一九三一年、この謎を解くべく、再度クルイレンコを隊長とする科学アカデミー登山隊がガルモ氷河の源頭に入り込んだが謎は解けなかった。一九三二年、クルイレンコを隊長

とするソ連科学アカデミーとそのタジク支部の合同遠征隊は再度バミールに入り、隊を三隊に分けた。第一隊は両面のガルモ氷河へ、第二隊は東面のフエドチェンコ氷河の支流のビヴァク氷河へ、第三隊は北面のフォルタンベック氷河へ入った。この内の第三隊は、ついにフォルタンベック氷河の更に上部の広大な雪のプラトーから上部へそそり立つ高峯を確認した。こうして、やっとソ連の最高峰七四九五メートルが確認され、当時のソ連の元首の名をとり、スターリン峯と名付けられた。しかし、一九五六年のスターリン批判によって、一時同峯は無名峯となったが、その後コムニズム峯と改名された。

同峯は翌三三年にソ連科学アカデミー及び同タジク支部合同遠征隊により、ビヴァク氷河を経て東稜ルートから登頂された。登頂者はE・アバラコフである。

その後バミールはソ連のアルビニスト達の独壇場となり、コムニズム峯やレーニン峯は数多くのヴァリエーション・ルートが登られ、又数多くの来登頂も登頂された。

しかし、資本主義国のアルビニスト達には長年の間、バミールの門戸は固く閉ざされていた。やっと一九六二年、イギリスのJ・ハント隊がソ連と合同隊を組み、コムニズム峯に登頂した。これは同峯の第十三登に

なったが、このイギリス隊のバミール遠征は、かつて十九世紀後半にインド領や中国領よりバミールへ北上西進を目指したイギリスの、バミールへの執念の余蘊を感じさせる。

レーニン峯が資本主義国に開放されたのは一九六七年である。この時はソ連邦建国五〇周年記念国際アルピニアドがレーニン峯北面で開催され、社会主義国の他ソ連と最も緊密なオーストリアとイタリヤのアルピニストが招待されている。第二回目として、レーニン生誕百周年記念国際アルピニアドが同じくレーニン峯北面で開催され、これには東欧諸国の他、資本主義国のソ連労働組合スポーツ協会と関係を持つ登山団体が数隊招待された。日本からも上田哲農を隊長とする四人の隊員より成る登山隊が参加した。

更に一九七四年同地域で、今度ははじめて資本主義国のアルビニストだけを対象にした、国際バミール・キャンプが開催された。我々の新大、大阪外大山岳会の十五名より成る合同隊が、長い間の対ソ交渉の末、このバミール・キャンプに参加することと成功した。西徳二郎が最初の日本人として一八八〇年にバミール北面に足跡を残してから九四年目に、日本隊として第四番目にバミールの風物に接し、レーニン峯に登頂したのである。

レーニン峰 ルート概説

● 斎藤一弥

レーニン峰はソ連邦第三の高峯である。この七一三四メートルの高峯において、ソ連アルピニズム連盟を中心として、現在までに数々の山岳集会を催して、ソ連独自のアルピニズム憲章に基づいて山岳訓練を行っている。山岳訓練といっても我国のような登山者研修会とは規模が違い、ソ連邦の山岳関係組織が全て参加するといった規模である。ソ連邦への外国遠征登山隊は外国隊のみに許可することはなく必ずソ連ア連盟の登山隊が同行するのが常である。

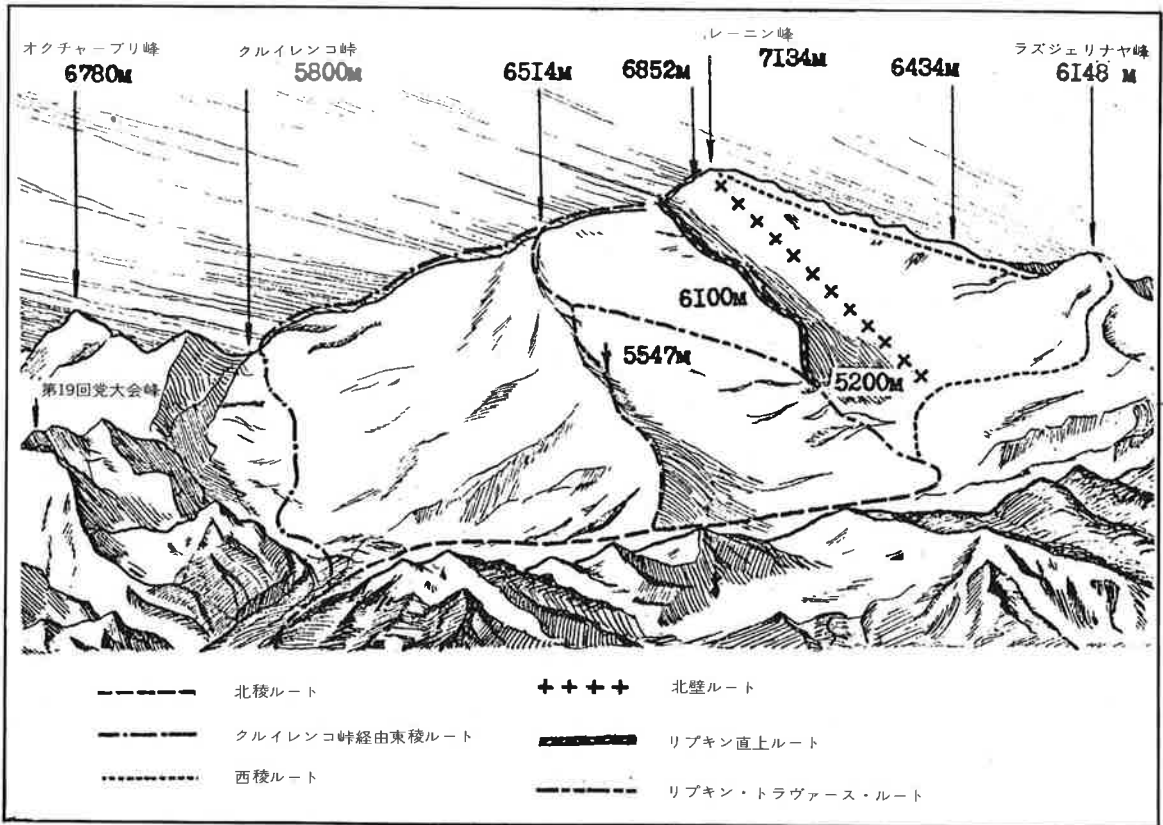
レーニン峰はバミール高原の北端に位置し比較的アプローチが短いので、現在までに七一三四メートルの高峯に千名以上の登頂者がいる。七千メートル級の山でこれだけ登頂者の数が多いのは世界一だろう。これはソ連の登山形式が集中登山形式をとることと、毎年毎年レーニン峰において登山者集会を開いているからであろう。

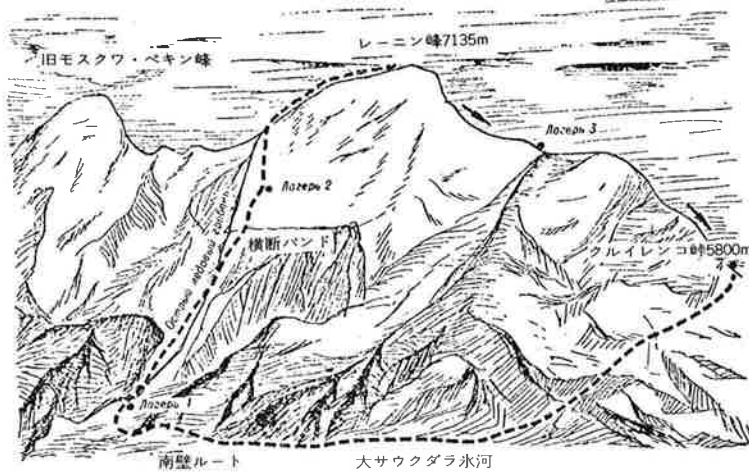
レーニン峰の登頂ルートはそのアプローチの容易さからキジル・スーの支流アチク・タシュがレーニン峰

北面の絶好のキャンプサイトである。この標高三七〇〇メートルの広大な草原のアチク・タシュをベースキャンプとして登山者集会が行われることが多い。このキャンプサイトまでは、オーシからキジル・スー沿いにあり、世界一長大なフェドチェンコ氷河の北面入口アルチンマザールへ通ずるテルスアルガ峠への分岐点ダラウト・クルガン部の落まで、飛行機を用いてアライ山脈を越える。ダラウト・クルガンからはローリー車でキジル・スーをさかのぼり、数時間で到着できる。また、別のルートは、オーシー・ホログパミール公道をサリ・タシから、キジル・スーに沿って十数時間で到着できる。

レーニン峰北面のルートは現在までに五つのルートが開拓されている。それらについて簡単に概説しよう。これら北面のルートはアチク・タシのベースキャンプから、第十九回党大会峯（五九二〇メートル）を左前方に、クルイレンコ峠（五八〇〇メートル）を正面にみながら、一時間半で、ネギの原に到着する。

ネギの原からはユーヒン峯（五一二〇メートル）からのびる尾根の鞍部「探検家の峠」へ向って支流右岸沿いに行く。峠への登りはきわめて急傾斜で、きつい登りである。探検家の峠へあがると前方がひらけ眼下にレーニン氷河下部がよくみえる。





外国隊でこの峠をデポ地として使っていた隊もあつた。この峠からレーニン氷河上に行くには、かなり下降し、さらに登らなければならぬ。レーニン氷河上に出るもう一つのルートは、アチクタシ谷を忠実につめ、氷河舌端を越えて来るものもあるが、舌端が非常に悪く、このルートは現在あまり使用されていない。氷河上に出てからレーニン主氷河からの北面ルートとレーニン東氷河のクルイ

レンコ峠・ルートとがわかれている。主氷河からの北面ルートは、ラズジェリナヤ峯經由西稜ルートとリプキン岩直登ルート、リプキン岩ルート、五六〇〇メートル附近から北稜へのトラバースルート、の三つの登頂ルートと北壁直登ルートがある。またクルイレンコ峠經由のルートは、レーニン東氷河をつめ、急な雪壁を峠に向つて直上し、長大な東稜をたどつてレーニン峯に達するルートがある。

またクルイレンコ峠ルートはレーニン峯のヴァリエーションルートである南壁ルートへのアプローチとしても使用されている。これらのルートについてその特徴を概説しよう。

ラズジェリナヤ・ルート

最も一般的ルートの一つで、今回のキャンプでも最も多くの隊がこのルートをとつた。雪崩の危険は北壁下部のトラバース部分を除いて心配なく、クレバス帯も四八〇〇メートル附近にわずかに存在するだけである。ラズジェリナヤ峯への登りはきついが、西稜に出たらは比較的単調な登りが続く。西稜は長大な尾根で登りのときには追い風を受け、下りには向い風となり、風雪時には尾根筋が広く、ルートファインディングが難しくなる。

リプキン稜直上ルート

レーニン主氷河末端から、リプキン稜にとりつき、標高二〇〇〇メートルを稜通しに直上するルートで、傾斜が比較的急なので、高度をかせぎ、キャンプの数を少なくするため有効なルートである。高度六七〇〇メートルで、東稜に達する。今回のキャンプではこのルートをとつた隊は少なかつたが、短期決戦となつた我々にソ連トレーナーの推薦したルートである。

リプキン・トラバース・ルート

とりつきはリプキン稜直上ルートと同じであるが標高五五〇〇メートル附近のシュルンド地帯上部を左側に北稜方向へトラバースし、六二〇〇メートルで北稜に達し、北稜通しに東稜へ向かう。このルートは、多くの隊によつて使用されており、レーニン峯へのノーマルルートの一つである。北稜へのトラバース帯に新雪後に雪崩の危険があるという説明であつた。

クルレイニコ峠ルート

レーニン主氷河からわかれて、東氷河に入り、巨大なセラツク帯を通り過ぎる。氷河上のルートは主氷河よりはるかに悪いが、四三〇〇メートル以上は心地よい氷河ルートとなる。

四五〇〇メートルからは標高二三〇〇メートルの急な雪壁で、随所に雪崩の跡がみえる。この雪壁下部はクレバス帯で、レーニン氷河随一の難所である。雪壁中二ヶ所程大クレバス帯があるが、ここが、このルートのキャンプ地となつている。クルイレンコ峠(五八〇〇メートル)からは長大な東稜を経て、レーニン峯に達する。一九六七年レーニン隊は活躍したオーストリア隊のレーニン峯初縦走もこのルートから、西稜・ラズジェリナヤ峯を経てレーニン主氷河に下つている。またこの隊はクルイレンコ峠から頂上を経て、頂上直下から北壁の初下降にも成功している。

南壁ルート

レーニン峯のヴァリエーションルートの一つで、前述のオーストリア隊がクルイレンコ峠から大サウクダラ氷河に下降し、氷河末端で一泊、次の日南壁にとりつき、苦闘の末六五〇〇メートルでビバーク、翌日、旧モスクワ・ペキン峯に連なる南壁に出てレーニン峯頂上を踏み北東稜、六五〇〇メートルでビバーク、次の日クルイレンコ峠を経て下山している。南壁は今回もアメリカ隊などによつて計画されていたが、クルイレンコ峠からの雪崩によつて、すべて中止された。

レーニン峰(7134m)登頂クロニクル

田村俊介

登頂年度	登頂者数	登頂ルート、登攀隊員など	登頂年度	登頂者数	登頂ルート、登攀隊員など
1928	3	南面から大サウクダラ氷河を経て初登頂。ドイツ隊。登頂者E.アルウィン、E.シュナイダー、K.ウィン、隊長W.リックマース	1962	38	大サウクダラ氷河よりクリレンコ氷河を経て。隊長V.モノガロフ
1934	3	レーニン氷河より北斜面を経て。隊長V.アバラーコフ	1963	3	レーニン氷河から北斜面を経て。3人のツーリスト
1937	8	同上ルートより。隊長L.バルハシ	1964	15	大サウクダラ氷河よりクリレンコ氷河を経て。隊長V.ソウスチン
1950	12	同上ルートより。隊長V.ラツェク	"	6	同上ルート。隊長U.サバロフ
1954	7	レーニン氷河からラズジェリナヤ峰を経て。隊長V.コワレフ	"	14	レーニン氷河から北斜面を経て。隊長A.マリヤーシェフ
1955	7	オクチャブリ氷河を経て、オクチャブリ峰から縦走。隊長K.クジミン	"	15	大サウクダラ氷河よりクリレンコ峠を経て、下降は北斜面より。隊長N.スネギレフ
1956	16	レーニン氷河からラズジェリナヤ峰を経て。隊長A.コロレフ	"	10	オクチャブリ峰より縦走し、北斜面下降。隊長G.ソロドヴニコフ
1957	8	同上ルートより。隊長V.エリチベコフ	1965	13	レーニン氷河から北斜面を経て。隊長G.チュノーヴキン
1958	10	同上ルートより。隊長A.アルザノフとO.グレムボッツキイ（最初の女性登頂隊員E.マトベーエヴァを含む）	"	16	レーニン氷河から北斜面を経て。隊長Yu.モローゾフ
1958	14	大サウクダラ氷河及びクリレンコ峠を経て。隊長D.メズマリアシビリ	"	5	レーニン氷河より北斜面を経て。チュコ隊。隊長M.ミロスラフ
"	38	同上ルートより。隊長K.クジミン（21人のソ連隊員と17人の中国隊員）	"	15	大サウクダラ氷河よりクリレンコ峠を経て。リトアニア隊
1959	14	レーニン氷河から北斜面を経て。隊長P.シュミーヒン	"	14	同上ルート。エストニア隊。隊長P.ワレップ
"	6	大サウクダラ氷河よりクリレンコ峠を経て。隊長S.サボン	"	14	レーニン氷河より北斜面を経て。隊長V.リヴシェフ
1960	25	同上ルートより。隊長B.ロマノフ	"	14	同上ルート。隊長A.シュクーロフ
"	8	北面よりクリレンコ峠を経て。隊長V.チェレドヴァ	"	10	レーニン氷河よりラズジェリナヤ峰を経て。B.シヴツォフ
"	6	レーニン氷河からラズジェリナヤ峰を経て。隊長V.アバラーコフ	1966	5	同上ルート。ウズベク隊
"	24	レーニン氷河から北斜面を経て。隊長P.スコロボガートフ	"	17	同上ルート。隊長A.ザイドレル
"	21	レーニン氷河からラズジェリナヤ峰を経て。隊長A.ロマノフ	"	19	レーニン氷河を経て北斜面より。隊長A.ピャプーヒン。A.マコヴェツキイ。G.ロジャリスカヤ(三隊)
"	5	レーニン氷河から北斜面を経て。(正面ルート)隊長Ya.アルキン	1967	299	ソ連邦建国50周年記念国際アルピニアード。東欧諸国隊の他オーストラリア、イタリア隊が参加し、合計40隊が多くこのルートより登頂
"	18	オクチャブリ氷河から縦走。隊長L.アフヴレディアニ	1968	66	
"	9	レーニン氷河からラズジェリナヤ峰を経て。隊長V.アンドレーエフ	1969	170	レーニン生誕百周年記念国際アルピニアード。東欧諸国隊の他イタリア、オーストリア、日本、モンゴル、ネパール隊が参加
"	3	レーニン氷河から北斜面を経て(正面ルート)隊長V.アバラーコフ	1970	206	
1961	7	レーニン氷河から北斜面を経て。隊長B.コルシュノフ	1971	38	
			1972	47	
			1973	48	

医療薬剤・器材

(1) 全員に配布した薬剤

種類	品名	数量
総合ビタミン剤	アリナミンF	30T
ビタミンC剤	ハイシーA	14T
凍傷予防剤	ユベラニコチネート	20T

以上を個人持ちとして配布し、使用については個人の意志にまかせた。

(2) 医療薬剤

種類	品名	数量
鎮静睡眠剤	セルシン	60T
	ベンザリン	50T
鎮痛下熱消炎剤	ペル（風邪薬）	100T
	メブロン	100T
	セデス	250包
	アミサール	100T
	トランコパール	200T
	メチロン注	20A
	ソセズン注	15A
鎮痙剤	スバスメックス	100T
	ダイピン	50T
胃腸剤	ラックビー	300T
	ハロミン	60T
抗生物質	ケフレックス 250mg	100T
	ミノマイシン 100mg	40T
	ウイントコイロン 250mg	30T
	ケフロジン筋注 500mg	10A
末梢血管拡張剤	カピラン	240T
	ロニューール・タイムスパン	240T
強心剤・昇圧剤	カルニゲン注	10A
	ピタカンファー注	5A
	ノルアドレナリン注	5A
ステロイド剤	ソルコーテフ注 100mg	1A
眼科	テーカイン点眼	4
	リンデロン点眼	4
	リクイフィルム点眼	4
	フラピタン点眼	4
外用薬	ペニシリン軟こう	8
	ベトネベート軟こう	8
	ボラギノール坐薬	10

(3) 医療器材

品名	数量
聴診器	1
血圧計	1
体温計	5
酸素ボンベ	2
流量計	1
酸素マスク	1
カットパン	3箱
包帯	20
脱脂綿	
滅菌ガーゼ	
注射器 5cc.	20
10cc.	20
注射針	50
ヒビテン液(消毒)	1ℓ

会計報告

加藤勝久

昭和50年4月1日現在の新潟大学山の会バミール登山隊会計の収支は次の通り。

<収入>

1. 隊員共託金	3,720,000-
2. 寄付金	1,323,000-
3. 原稿料・出演料	290,320-
4. 装備等売却金	7,410-
合計	5,340,730-

<支出>

1. キャンプ“バミール”クーポン券代	3,183,750-
2. 共同装備購入費	307,816-
3. 食料品購入費	26,764-
4. 装備等輸送費	440,585-
5. 通信費	108,886-
6. 雑費	131,551-
7. キャンプ“クリミア”経費負担金	90,000-
8. 隊員壮行会経費	15,000-
9. 流失装備補償費	70,200-
10. 登頂記念写真展経費	131,230-
合計	4,505,782-

新潟大学山の会・大阪外国語大学山岳会パミール登山隊装備一覧表

May10, 1974

Rev1 June16, 1974

装備係 齋藤一弥 / 近藤憲司

1. 重量表

分類	重量(kg)	合計重量(kg)	
I. 個人装備(登攀用)	[17.4]	21.7kg	
II. 個人装備(旅行用)	[4.3]		
III. 露営用具	157.3	204.7kg	
IV. 燃料・照明	23.4		
V. 登攀用具	59.3		
VI. 通信・記録	82.8		
VII. 炊事用具	24.7		
VIII. 工具類	16.4		
IX. 文具類	4.5		
X. 調査用具	7.5		
375.9			

2. 基本方針

○現有装備の有効利用

○軽量化

○輸送の簡易化

3. 集結方法

個人装備……原則として5月中に個人のもとに集結しておくこと

共同装備……原則として新潟に郵便・鉄道便等により5月末日までに集結する

I. 個人装備(登攀用)

品名	規格	数量
羽毛服(上)	シングル	1
ウィンドヤッケ	ダブルナイロン	1
オーバースボン	ダブルナイロン	1
セーター	ウール	1
カッターシャツ	ウール	1
ニッカズボン	ウール	1
下着(上下)	ウール	各1
＃(上下)	化繊	各1
下着(パンツ)	化繊	3
目出帽	毛糸	1
帽子	ゴルフ帽	1
手袋(5本指)	ナイロン	1
＃(＃)	毛糸	3
オーバー手袋	ナイロン	1
靴下(厚手)	毛糸	3
＃(薄手)	＃	3
ストッキング	毛糸	1
登山靴	ダブル	1
オーバーシューズ	ナイロン	1
ロングスパッツ	ナイロン	1
寝袋	羽毛	1
シュラフカバー	ナイロン	1
エアマット	半身	1
テントシューズ		1
アタックザック	60cm以上	1
背負子	ジュラ	1
私物袋(大中小)	ナイロン	各1
スカーフ	絹	1

品名	規格	数量
アイゼン(ケース・バンド付)	8本爪以上	1
ピッケル(バンド付)		1
サングラス(ケース付)		1
ゴーグル		1
安全ベルト(ビナ、リングロープ付)	ナイロン	1
ヘッドランプ(電池付)		1

II. 個人装備(旅行用)

品名	規格	数量
ポロシャツ	長そで	1
＃	半そで	1
ズボン		1
ランニングシャツ		1
サンダル(軽)		1
雨用コート(上・下)	ビニール	1
水筒	1ℓ以上	1
ナイフ		1
裁縫セット		1
化粧石けん		1
歯ぶらし・歯みがき粉		1
タオル		3
こうもり傘	折りたたみ	1
トイレットペーパー	巻型	2
リップクリーム		1
カメラ		
パスポート		
写真(査証用)		2
日焼止クリーム		
コンパス		

品名	規格	数量
手帳		
筆記用具		
茶用コップ		1
スプーンorフォーク		1
缶きり(小)		1
マッチorライター		
細引		少々
私物整理袋	布・大	1

III. 露営用具

品名	規格	数量
冬天一式	8人用	1
{内張、ポール、シード型、フレーム含む}	6人用	2
＃	4人用	1
＃	5人用	1
軽テント一式	4人用	1
(フライ、外張り、フレーム)	3人用	1
マットレス(トーレベフ)	6mm	13r
＃	10mm	21r
硬雪用ベグ	ジュラパイプ	13
＃	鉄製	7
竹ベグ		60
8天用フライ		1
ツェルト		6
スコップ		4
ブラシ		5
エアーマット用ポンプ		3
予備シュラフ		3

品名	規格	数量
氷ノコギリ		2
細引予備	6 mmφ	20m
"	4 mmφ	30m

IV. 燃料・照明

品名	規格	数量
ホエブス	#625	5
"	#725	1
ガスバーナー		1
カートリッジ		10
メタ	スイスメタ	13パック
ケイネン		1
ジョウゴ	フスにつける	6
オイルポンプ		2
ホエブス部品		4
ホエブス用予備ポンプ		1
ローソク		60
ガソリンタンク	20ℓ	3
"	10ℓ	3
"	5ℓ	5
"	2ℓ	4
"	1ℓ	2
ガソリン		125ℓ

V. 登攀用具

品名	規格	数量
ザイル	9φ×40m	8
"	8φ×40m	1
フィックスザイル	7φ×40m	3
"	8φ×40m	4
ロックハンマー		2
アイスバイル		4
カラビナ		45
アイスハーケン	U 25cm	10
"	スクリュウ	10
"	パイプ	9
"	スクリュウ	9
ロックハーケン	タテ	11
"	ヨコ	10
"	long	3
スノーバー	70cm	5
"	100cm	1
"	ジュラパイプ	11
アブミ	3段	3
"	3段ハシゴ	4
シュリンゲ	6φmm	32m
標識棒	ナイロン 赤旗47	
スキーストック		2
ワカン		3

品名	規格	数量
予備アイゼン	8本	1
滑車		2

VI. 通信・記録

品名	規格	数量
トランシーバー	26・968/976 MHz	5
8mm撮影機		1
" フィルム		40
カメラ	35mm	3
35mmフィルム	reversal	30
"	negative	70
"	black&white	70
プリズム	×10	2
高度計	10000m	1
テープレコーダー	カセット	1
" (テープ)		20
ラジオ		1
温度計	-40℃~40℃	5
予備電池	UM-3	150
	UM-1	120
トランシーバー大型		1
三脚		1

VII. 炊事用具

品名	規格	数量
コッヘル(小)	2~3人用	1
" (大)	3~4人用	7
包丁(小)		4
オタマ(小)		4
茶コシ	ガーゼ	10
割り箸		20
まな板	ベニヤ板	4
布バケツ	12ℓ	2
食品 大		45
ふきん		10
たわし		4
クレンザー	ママレモン	1
テルモス	750cc	10
マッチ	小箱	40
ポリタンク(水用)	2ℓ	3
ブス台	ベニヤ板	7

VIII. 工具類

品名	規格	数量
ハネバカリ	~30kg	1
ホエッスル	プラスチック	15
キャンバスバック		10
ガムテープ		6

品名	規格	数量
荷札		100
スズランテープ		2巻
プライヤー		4
キリ		2
ドライバー	十、一	各1
針金		30m
エアマット修理用具		4
アイゼンバンド	予備	4
ヘッドランプ電池	ワンダ	65
ヤスリ		3
洗剤(石けん)	個形	2
皮革油		5
クライマーゴーグル	予備	2
スキーゴーグル	"	1
メジャー		2
はさみ		1
ワゴム		多
スパナ	19mm	1
スパナ	30mm	1
モンキーレンチ		1

IX. 文具類

品名	規格	数量
マチックインキ	赤、青、緑	各3
サインペン		4
メモ帳		2
色鉛筆(6色)	Set	1
通信用カード		500
集計用紙		2
封筒	エアメール 普通	70
ビニールテープ	black	3
日本国旗		5
ソ連国旗		2
隊旗		5
隊バッヂ		70
トイレットペーパー		7

X. 調査用具

品名	規格	数量
はかり	10kg	
"	2kg	
"	100g	
ビニール		3
ノート		2
最高最低温度計		5
日記温度計		1
折尺		2
ノコギリ		1
点格子板		1
カウンター		1
ハサミ		1
手上計算機	予備電池付	1

食料品リスト(日本食)

品名	規格メーカー	数量	重量(g)	備考
α米	尾西食品	20袋	2,800	
牛飯	ジフィーズ	15	1,800	好評
椎茸飯	ジフィーズ	15	1,725	好評
鶏飯	ジフィーズ	15	1,725	好評
インスタントラーメン		30袋	3,600	高所でも問題なし
天ぷらソバ		30袋	3,600	好評
モチ		5パック	3,500	カビ
インスタント味噌汁	赤ダシ	10袋	650	
すいもの	松茸	4袋	100	
お茶づけのり		2袋	160	
玉ネギ	乾燥野菜	5	40	好評
ほうれん草	"	5	60	"
人参	"	5	100	"
じゃがいも	"	5	125	
切干大根	"	5	500	"
干しシイタケ		3	90	
トロロコンブ		4	280	
ふりかけ		5	200	
ノリ(焼きのり)		5	400	
高野豆腐		3	300	
ワカメ		5	250	
本トウワラの素		3	270	うまくだきず
するめ		6	600	
けずり節		3	240	
ひだら		2	500	
緑茶		15	1,500	好評
粉末ジュース		5	1,000	
つけもの		10袋	1,240	
つくだに		5	350	
梅干		5	750	
調味料				
ワサビ	チューブ入り	3	150	
カラシ		3	150	
マヨネーズ		5	1,500	
味噌		2	800	
醤油	乾燥・ジフィーズ	15	750	好評
カレー粉		5	250	好評
酢(すしの素)		5	400	
チャーハンの素		2	100	
八宝菜の素		3	240	
味の素		5	250	
七味トウガラシ		5	500	
ニンニク	チューブ入り	3	150	
カツオダシの元		3	210	好評
乾燥果物				
バナナ		5	1,250	非常食として各人分配好評
パイン		5	800	"
アンズ		5	1,500	"
菓子果物				
すこんぶ		5	250	

品名	規格メーカー	数量	重量(g)	備考
ようかん		5	1,500	好評
プリン		3	330	好評
ゼリーの素		3	330	
包装材料				
ビニール袋		60枚	350	好評
アルミホイル		2巻	360	
サランラップ		1巻	200	

ソ連支給食料品リスト

品名	包装	備考
パン	ナシ	黒パン
マカロニ	紙袋	
ソーメン	"	日本のソーメンほど長くない、比較的使用した
ワドン	"	"
ビスケット	ナシ	あまり甘くない
チーズ	ナシ	
バター	ナシ	
ココア	紙パック	日本製とあまりかわらず
紅茶	紙パック	"
インスタントコーヒー	カン入り	"
コンデンスミルク	"	"
粉ミルク	紙パック	
砂糖	紙パック	角砂糖 すぐ溶けない
チョコレート	紙	あまり甘くない
カンズメ(牛肉)		
カンズメ(豚肉)		油多し 不評
カンズメ(タン)		
カンズメ(シヤケ)		好評
ソーセージ	ナシ	
ソーメンスープ	紙袋	
粉末ジュース	"	
リンゴジュース	2号ビン入り	重い
アンズジュース	"	重い
プラムジュース	"	重い
スイカ		好評
ネギ		
トマト		
ジャガイモ		
キャベツ		
タマネギ		
キューリ		
シヤケ		クンセイ 好評
干魚		
キャビア		
タマゴ		
イクラ		

パミール遠征から帰国して一年が経過してしまいました。この遠征隊の報告書として、その基本的まとめ方のミーティングをアチクタシのベースキャンプで行い、帰国後それぞれの隊員に原稿をお願いして、報告書作成にとりかかりました。その後幾度かミーティングを開いて、草案の検討を行い、ここに報告書の完成をみることができました。御協力ありがとうございました。

●編集後記

最後にこの遠征隊に終始御協力下さった、日本体育協会、日本山岳協会、日本山岳会、駐日ソ連大使館、駐ソ日本大使館、新潟県山岳協会、新潟大学、大阪外国語大学、日ソ協会、旧制新潟高専の会、新潟市役所、新潟日報社、サンケイ新聞社、BSN、シオノギ製薬、イチムラ百貨店、フジフィルム新潟現像所、新潟大学人文学部同窓会の諸団体を始め、御尽力・御協力下さいましたその他の団体、協会、個々人の方々に感謝致します。

(K・S)

パミール遠征登山報告書
昭和50年8月25日発行
非売品

●発行者
パミール遠征隊報告書作成委員会

●編集者
〒0252(23)新潟市旭町通1
新大医学部法医学教室内

●編集制作
PEG (ブランチ・ギルド・エターナル)

〒105野口ビル2641
東京都港区西新橋1の5の1